

54
84

滑替風流之日月星辰

地 天 別

咄笑快樂之森羅萬象



政界之雲行觀測スレ

別天地序

仰視物此為天日月星辰風雨雷霆之比
 儔皆屬之俯瞻物此為地國土草木水火
 人物禽獸魚介皆隸之千態萬象幼麼恒
 沙何以究之智者創思推理天象無免人
 物禽獸無不究極蓋以唯物之理質器械
 測之學理推致焉唯至別天地則屬心識
 之幽微器械不可及學理不可推致是以
 聖哲潛心智賢凝念而未究蓋奧所以有

心理學也。何曰別天地。心性本具之變化。乃能創造之。夫昭明心爲日。淨清心爲月。而血氣人類不能寂然動。以作千態萬象。則愛心爲水。慾心爲海。猛心爲火。堅心爲金。柔心爲木。平心爲土。高心爲山。頑心爲石。怒心爲雷。烈心爲風。和心爲雨。蘊心爲雲。悲心爲露。昏心爲霧。不德背倫爲禽獸。魚介豈不別天地乎。是皆天地之心之所生。則天地鬼神人類萬物。心性貫通。体用

一源之真理不可誣也。頃書肆集文館將刊行別天地者。來提大要。且曰。此別天地非天地之天地。亦非別之天地之謂也。則蜉蝣天地之外。嘯吟乾坤之上。以愚弄世間人物事。縱談放言爲趣意。豈唯心理之謂乎。余曰。子天地與心爲別。頗謬矣。釋氏說華嚴曰。心外無別法。又曰。三界唯心造。然則春花鳥嘯。秋月啼蟲。此唯物天地。縱談放言滑稽風流。和平諧謔。唯心天地之

四
縱談放言。共得清明和平。人天歡舞。國家
圓滑。古今賢哲之所希。不出此外也。子所
謂別天地亦收唯心天地之暴風奔雷。以
在望人心之平和圓滑乎。果然其創思凝
念智者之上也。子以爲如何。集文館曰唯
々爲之序。

明治廿四年八月張州南昆陽寓居

任天居士走筆

別天地の序詞

天地玄黃とは千字文の冒頭。天地剖判とは神代の卷の説は下め。天地
人とは儒者の云草。天皇氏地皇氏とは支那野變時代の王様の名天神。
七代地神五代とは古事記の記者の大ッ腹。天地とも神様が一周間に
製造したとはアトメン連の誇り顔。天地無始無終とは佛氏が垂なが
どの詞尿。天と云ふ名も地と云ふ稱も人類が附た符帳。始め地天と附
れば今でも地天。地が尊くて天が卑い様ふ考がへが起るは當然いの
看板。掛直はの正札附一文と雖も負いせまド。習はせに出て天地
と云から天は高くて尊い様だが天は足の下にもあり。地は低いから卑
い様だが毎年毎月毎日人類を壽藏の裡へ喰て仕舞威力あり。尊といと

云も卑屈根性から割出した稱へ。

類あつて天地あり。人類がなくて誰か天地の名稱を與へ様ぞ。叱ら

則でも……撲けば則でも天地間に一番尊い者は諸君と乃公にして即

ち天上天下唯我獨尊。法律も除て通り。巡査も御世辭を云て向へ曲る。

裁判官は聖德太子の打扮を仕てゐるか。唐朝の服を着て居るか。頼と

知らず。執達吏とは奪掠。公證人は故障人かと間違ても更に損もした

ことなきは天上天下唯我獨尊連の重寶サ。金が敵きと思はばこそ酒が

敵で折々決闘。管を卷て天地を罵り散ら。ケツブを吐て眞神を叱り

仆し。一偏の法螺は富士山を杯の中へ投り込。百遍の萬八は古今の豪

傑どもにカツボレを踊らせ。釋迦も孔子も耶蘇もマホメツトもテール

スものシリく坊主になつて謝辭ねは承知しないと云ふ立氣を振起す

は即ち別天地に遊遊し日月を撲き落す諸君と乃公の威力ならせや。

而ふして醉蕩の賜物ならせや。世の馬鹿者は名利に奔走し。權勢汲々

し金糞を撒散して集議院の代議士にならんとは別天地を知らぬ愚狀

の奴天上鼻屎を三文が所舐させて本氣の沙汰に仕て遣たいとは別天

地連の老婆心切。鹿爪らしい無責任の演説は越路太夫は泣すことは

出来ぬ。欄内埋草の論説は女郎の文は悦こんで讀れぬ。政治上の運

動は郵便脚夫は人民に利益を與へる。内閣の交迭は官員録の綴直し

て濟でゆき。政府案の通過はれあしが早い。社會か厄介か。臍がブチ飛

で天上界でキリく舞と天人どもに目を回さすことを氣の毒なれ。遊

ひなくんば幸甚

凡そ笑ひを促かすの外物は種々にして數限りも勿るべしと雖も道士が觀念上に浮み來れる者は大抵左の幻象が之を促かす者と信せり

- 一 不意に不恰好な物を見るに於て.....
- 二 不意に卑陋なる詞ば.....響を聴く時に於て.....
- 三 危険ならざる驚愕に於て.....
- 四 非常なる詞の間違に於て.....
- 五 其希望の成就せし時に於て.....
- 六 嫉思ふ人が失策の時に於て.....
- 七 愚狀なる.....馬鹿氣た言語動作に於て.....
- 八 不權衡なる形容詞が突然漏るに於て.....
- 九 意氣相投する時に於て.....
- 十 矜誇傲然の時に於て.....

以上十項は皆な笑ひを促かす幻象の材料なりと思惟するなり。然れども其笑ひに屈曲して出るあり。單紙に出るあり。婉曲にして出るあり。卒然として出るあり。其種類も亦た一様ならず今仮に一項より十項へ笑の種類を配附せば或は左の如きを得ん

- 一項に属する者 嗤笑 譎笑 絶倒
- 二項に属する者 苦笑 罵笑 疾笑及び一項に属する三笑
- 三項に属する者 驚笑 罵笑 突笑
- 四項に属する者 微笑 苦笑 罵笑 絶倒 嗤笑 冷笑
- 五項に属する者 微笑 嬉笑 容笑
- 六項に属する者 微笑 冷笑 密笑 容笑
- 七項に属する者 一、二項に同じ
- 八項に属する者 同上
- 九項に属する者 嬌笑 強笑 微笑
- 十項に属する者 冷笑 鼻笑 肩笑 罵笑 苦笑

飲でくだアまアさヤ：なほ可愛ツ：ハア此りや／＼キ、吉公ドイ堂だ
と不意に詠い出さんには列坐一驚すると同時に咄笑すべく。又紳商の炊女が米を精な
ら不意に濁聲を放つて

裏の窓かアら：鶺鴒だまアなアけてヨー今夜來るとの知せかヨー：ホイ／＼
と眞面目に哦鳴には石部流の且那も容易に笑はぬ御新造令嬢も疾笑に耐ずして絶倒せる
なるべく。又突袖して揚々然と往來する人にして不意に一發の放屁を放んには聴者苦笑
咄笑するは往々ある事實なり。此れ不意に不恰合の音聲に接してれかしいが笑ひを呼來
る幻象にして此の笑ひには稍や氣の毒の感情を含みて聴者自から却つて赤面を分擔する
の形状より來る。蓋し感受性が反動して其人の慙愧を相像する突如たる相像力の發作に
成れり。

○危険ならざる驚愕に於て……………

落語家が怪談の咄しを説去り説來り。殊に低聲の柳揚を以て幽怪青燈の狀を演ずるに當
りて俄然として擊一擊戸障を鳴さば。其頓挫に驚愕し尋て驚笑と突笑は起るべく更に轉

じて罵笑となるべし。又春風台湯の日野外の遊びに轉落して堤の下に轉らん歎。悲しみ
を呼ぶの危険の材料なれども。草苔滑かにして危険なきを知れば。其驚忙愕然と同時に咄
笑す之を驚笑と爲し。此れ亦た轉落の狀の不恰合なるを感受し危険なきにを知覺し終に
屈曲して出る幻象なりとす

○非常なる詞の間違に於て……………

此の問題に就て起る笑ひは記性の煽動する影響に係り突如として笑ひの浪を打ものに非
ず。何となれば或人が公會に於て矛盾をホコトンと叫び：進退の惟谷を谷まると呼び
。或は冒頭を冒頭と讀過して平氣の平左ならんにはムシユン：惟谷：冒頭と知り得たる
記性は決して之を假借せず平和虚無の心性を煽動して笑いとなり自からを(記性)を感む
るの働らきを作に至る。故に此種類の笑は微笑……苦笑……冷笑……罵笑最も笑ひの
地歩を占たり。然れども八笑人。膝栗毛等の笑謔小説に特に一珍意外な語法を用ゐる煙霧の
間に笑謔を伏て人をして思はず絶倒せしむる者は記性の知る所に非ずして。新珍奇異の
感情が突如として面白に引出れ發して咄笑となるのみ。然し斯る感情の笑ひは長く記性

に止られて享樂の材料に供せらるものとす此れ八笑人膝栗毛は面白き小説なりとの感情が一般に與へられある所以ならん

○其希望の成就せし時に於て……………

代議士に當撰…金が儲つた…御役人に拜命…米がないのに十五錢取た…好た女と夫婦になつた…老若男女どなく其望みの成就し若くは成就の端緒を得たる時に於ての笑ひは欲性中最も微妙の…形状と心意より來る者なり。即ち權勢の欲。幸福を願ふの欲。結交の欲。貴重を受るの欲。愛相の欲。此等の欲が其目的の境遇に投じ平和虚無の心性を驚ろかすに於て發するの笑とす。是を以て此の境遇に投じたる人は力て笑を制さんどするも心性の驚ろきは竟に制すると能はず之が爲め容笑となり。耐られざる微笑となり。思はず嬉笑の顔面を解とどなるなり

○嫉思ふ人が失策の時に於て……………

同窓の學友若くは友人が一躍して奉任官一二等となり。若くは一獲千金の暴富を爲すか。或は權勢ある地位に立ば。一般の凡夫は暗々裡に嫉妬心を挿んで。恙望す。此れ權勢の

欲…幸福の欲等が自己の逆遇を顧みて平和虚無の心性を壞に出づ。是を以て一度其人が失策して免官となり。貧乏となり。或は權勢なき舊態に戻れば諸欲の情状は忽ち不平を解散し心性が本具に寸還る時に於て微笑…冷笑…密笑…容笑の諸幻状を呈する者とす。蓋し惡意の歡情が屈曲して嘲罵聲を顯はすものなり

○愚狀なる…馬鹿氣た言語動作に於て……………

彌次郎兵衛喜多八の所爲。卒八出目助阿婆太郎等の動作。世に賞玩する、所以の者は愚狀なる…馬鹿氣た言語動作が一々人の意外に出で之が爲め平和虚無の心性が甚だしき刺撃を受るに於て活潑に棒腹絶倒の幻状を顯はすものとす

○不權衡なる形容詞が突然漏に於て……………

嚴格なる人物即ち勝海舟翁が…親爺も近頃は勿々大もてにもてるよと云ひ。五尺の体が危ふく子爵になりそうであつた等の語を吐ば。伯爵たる翁の位地に對して其形容詞が不權衡なるを以て嘲笑微笑共に顯はる。然れども此等の語を普通一般の誑語家が漏すに於ては更に笑いを呼起の材料とならず。蓋し心性の本具は之が爲に動搖せざればなり。然

し卑陋の語を以て不權衡の景容詞を爲すに於て嘲笑と絶倒を招くとあり。此等は此の種類に屬さずして寧ろ前項に屬すべきものとす

○意氣相投する時に於て……………

英雄豪傑相會して共に語る時意氣相投すれば即ち顯はる。佳人才子相逢て目睫の電氣相感すれば即ち顯はる。只それ英雄豪傑佳人才子の相遇のみならず。朋遠方より來れば未だ相話せずして嬉笑先づ到る。共に此れ和氣霽然たる兆候を示す人類本善なる心性の作用なり。然れども仔細に吟味すれば嬉笑即ち情款中愛敬の結果にして。夫の諧笑とは頗る出所を異にするものとす

○矜誇傲然の時に於て……………

最も得意の時に於て。不意に巨額の金を得たる時に於て。他に向つて誇るに足る物類を購ひ得たる時に於ては未だ不得意の時…未だ金を得ざる時…未だ他に向つて誇るべからざる當時に在し本能上の悵鬱は得意に逢て忽ち解散し烈しき歡情と交迭して自己其物を誇る愉快は他を蔑視するの笑を呼來る。此の笑は表面上は冷笑なれども。其内部

に在ては非常の快笑にして其僅かに抑壓して冷笑を幻狀するなり。故に此の笑は起伏しツ、數日間繼續するものとす。何となれば其得意の愉快は容易に去るものに非ればなり以上十項の解釋は未だ幽冥まで穿ち得たる者に非ずと雖ども其道行に於ては敢て正鵠を誤まらざるものと信するなり。而して尙以前解釋の十項は如何る形狀の笑に屬するやと云に

- 第一第二は笑つて而して滑稽たり
- 第三第四は笑つて而して諧謔なり
- 第五は嬉悅なり
- 第六は蔭で拍、く羨の消滅なり
- 第七は滑稽諧謔の共進なり
- 第八は奇異なる突然なり
- 第九は和氣霽然たるなり
- 第十は自負自尊の花なり

斯の如く何れにしても笑たるに相違なく。平和虚無の心性を壊り動かしたる幻状なるが故に之を過超すれば忽ち變化して悲しみとなるは左の圖に於て明かなり

不恰合——笑 魯鈍の不危険

笑極も亦た流涕

○平和虚無の心理不意——驚動 不笑不悲は未だ其物を認定せず

畏怖——悲 悲極も亦た流涕

魯鈍の危険

此の圖に由て之を觀れば心性が不意の出來事に驚動し。而して其物其体が魯鈍にして不恰合に……危険ならざれば笑となるも其物其体が畏怖すべき魯鈍なれば即ち悲しみとなり。而して共に其極は流涕すると蔽ふ可らざる事實なりとす。去れば笑と悲しみとは毫髪を容ざる間の變化なりと思惟するも敢て大なる謬りなりとも云がたからん歟。是を以て笑も悲しみも心性の不意驚動が収まると同時に消滅して跡を駐めざれば笑は物識に屬するよりも心性に屬するが如し。然れども心性獨り笑ふ能はざれば笑なるものは

蓋し突如たる一幻状にして。面白と云とどれかしいと云ふとの影射たるや明かなり。世間豈に笑の後にねかしいと面白とを認するものあらんや。道士は尙ほ笑ひの幽冥を開くとどするも勿々小卷冊子の盡す所にあらざれば以上に大略を書し。他日又笑に屬する分解を試みんと欲す讀者幸に諒せよ焉

ねらが口

細川幽齋。豊大閤の珍愛せるあら手釜を摸造して其釜に。此はにせぢやと人に語るなど銘じたり。然れども其釜既に口あり。幽齋翁の逝去するや釜は依然と世に残りて其處を語りつく。况や人類の口をやねらが口をや。自由自在の口なるをや。國會場裏に夫の強派がツベコベして其改正を促すなる現行出版條例に抵觸してね眼玉を頂戴するの馬鹿を見ざる限りに於てねらが口を叩くは勝手次第なり……烟魔も舌を抜とならず……羸政も坑に放り込とならじ。請ふ自由なねらが口を看よ

BUNF-FOON. しるす

○是ぢヤア

総理大臣の年俸が八千圓……大臣の年俸が六千圓……歳暮には御祝義として御手元より金五千圓乃至四千圓の纏頭を賜はりたる大臣殿も國會の岡焼連中に大きに焼れ官制の改正と同時に危険なりし年俸は運よく珠算玉を継ぎ留たが。若し纏頭を頂戴しては又々岡焼連がゴタメタを持上ると御氣が附れ……思ひ切り……血の涕だ……愛妾に別るゝより辛い思ひをして纏頭だけは御断り申し上たと云ふ。パチく〜と二天作の五を遣て見ると年に四五千圓の身入が違ふ。是ぢやア別荘も權も手放しの龜の子にせずばなるまいと頭を狐たは誰御坐らう……チヨツ腹の中だはヤイ

帳面の穴……難來鼠

小僧が天麩羅の起食に帳場の小錢をくすね込。若い衆が矢場の姉や麥湯の白首へ入揚る爲に花客先の受取金を誤魔かし。番頭が月圓の仇者の爲に帳面へ小さな穴を明るは随分ある習いにて泥鼠の綿名を取りソウ〜に焚天國へ轉籍するとは新聞紙上の埋草となり吾も人も知る處で五猿が。近頃は小僧や番洲の上を往き。何の會社某の會所或は各國立

銀行の重役が五万十万三十万の大穴を帳面へ明て株主を困らし社會共つゞれの乱暴を働し……此を泥鼠と申さんか……啞アに……困鼠？難來鼠……

○何もソウ

良民の租税を横取して身代を作つた故岩崎の彌太公は子孫の爲に百萬圓以上の金を残し。其他井上伯の恩顧追従の藤傳……大喜すら子孫の爲に五六十萬圓の資産を残すのは常前の看板で。大工の符帳でへのへならん。然るに一文なしの貧乏新聞記者は己の懐ろ合を推して井上伯に及ぼし。ヤレ井上伯は子孫の爲に十萬圓残すとか慶長大判の茶卓が匡得めへつた……滑つた仆んだ。屁でもないことを書いて美やましがること馬鹿々々し……オイ一錢銅貨が千萬あると十萬圓だヨ……十萬圓は一億萬圓の千分の一だヨ……タツた一億萬圓の千分の一……一錢銅貨千萬斗りを残したつて何で不思議だらう。井上伯がこれん斗りの日腐金を子孫へ遺す様に書れて迷惑がるは有理だ……有理だ。モウ一ツね負に有理だ。オイ井上の阿兄。立派に十千萬圓斗り遺すと觸込給へサ

○議員の年俸廢すべし

吾々は色氣がない。國會の代議士になる色氣がない。繼つた所ろが厄雜國會の厄雜代議士と肩を列るは眞平御免だ。然が一体厄雜國會が持上。厄雜代議士の多いのは年俸が有からだ。年俸がないなら珠算と首ッ引をする土百や素漢貧は色氣を含み管がない。宜しく眞正の代議士を出さんと欲さは年俸廢すべし……政費節儉を怒鳴口……民力休養を囀づる。願で自分の年俸八百圓は猫糞の知らぬ顔の半兵衛……言行相違……厄雜代議士

○オイ博士どん

愛知の名古屋へ往た博士どんは同地の御馳走ふりと有名な名古屋藝妓が打揃ッてカツボレを踊たゆる大賞に賞て有樂名古屋は三府に亞都會だけエライもんだ廣徳寺の門だど賞たげな……汽笛一聲岐阜へ往しに御馳走ふりが堂だの藝妓がカツホレ……どは云まいが何しろ名古屋だけもてない所から岐阜は腐廢せりと大罵しりに罵ッて汽車賃迄も叩き戻してサランパンを極込だど云ふ。而て見れば以來博士どんを呼にはカツボレ雨しぼを見せれば大賞に褒ると受合とは秘事廣告の様でデエセう

○博士の神聖

博士の神聖は學藝に在り。學藝に由て愚弄を受しなら。嘲弄を受しなら(愚弄と嘲弄は拙劣の報醜)其愚弄と嘲弄が物理にも道理にも係ぬなら。博士の神聖を汚したど力味蛙も宜んべる。御馳走振の悪のと鈍問な扱いに疝癢玉をせり出して。岐阜全体を腐廢せりと罵り去しは吾々却つて博士どんの腐廢を……オ、笑止で御ざんす哩なア

○モウーッ

明盲目千人の中にオペル一冊讀る者あらば九百九十九人は其一人を尊とんで大博士と申し奉らん……所で此の無鳥嶋の蝙蝠殿が飛で鸚鵡鳥へ渡らば……只だ此れ一介の八級生……

○斯いふ諭示が出るだらうか

(東京)神田神社未社 將門靈社

内務省令第十一號に由り自今公然祭祀を行なふを許さず但し所轄警察署の許可を得たる者は此限りに非ずと……然が法律は測はることを許さねば豈乎此な糞棒的の事は御坐るいまい。底で西野文次郎。田野母秀顯。鳥田一郎の連中には公然の祭祀と有体の儘

に暮誌を作り建るとは省令外の事として……………

一口はなし

○ないものなし

萬古着大安賣所と書いた大看板、其下に御好次第無いものは御座らぬが手前の自慢と書いてある故、一人の意地の悪そうな男、ツカ〜と這入て番頭に向ひ「男、れ前さんの舖ではどんな物でもありませんか」と云ふと番「へいどんな物でもないものは御座いませぬ、大抵は揃つて居ります男、そんなら紋付の衣はありますか番」へいそれわ御座りませぬ男、「一八の蚊帳わあるか番、そのよふな細長い蚊帳わ、聞いた事がありますか番」男「それでは三角の蒲團は番、御座いませぬ男、」給の綿入わ番、御座いませぬ男、綿入の禪わないか、番「承たまわりますが始めて男、さしこの振り袖わどふじや番、れわいにくさま、男、六つ身の小兒着物わないか番、れ氣の毒様、御座いませぬ男、單物のどてらはないか番、ありませぬ男、」なんにも無い店じやなど云ふと。番頭はすまし込んで。夫故どんなものでも。ないものは無いませぬト申上げました

○名案

田舎者らしき老爺。旅宿舗を叩き「老、今日の日暮方に私の様な着物を着て私の様な人で。丁度已れの通り。庄屋様らしい人は止宿りませんか。ト三四軒も聞いて歩行いたが薩張り心當りがありませぬ。五軒目の家で主人が出て参り圭、へい先程貴下のよふな。丸で南瓜二つと云ふ程によく似合つた人が御止宿でしたが。用足しに出ると仰しやあつて。未だに御歸りが御座いませぬ。御用なら座敷へ上つて御待なされ。もう御歸りになりませぬ。老、ヤレ〜。實は尋ねる人は私じやつたが。れ前の家を見忘れて。四五軒もこうして聞きて歩行した

○虚言なら結構

親父の前を虚言で固めて家を外に遊び散らす放蕩息子が或夜深更に歸りて戸を叩くと内から戸を開けたは親父殿目を皿にして白眼付け今頃迄何處へ行つて居た？との霹靂一聲息子は氣を呑まれて例の虚言も出ですへい吉原へ「エ、又其様な虚言を吐くか

○留守で仕合せ

コレ朝吉やア、横町の傾斗先生の處へ行つてね……と云ひも終らぬに小僧は駆け出し
して頼て歸て来るのを待つて「ね前用も聞かずに馳出して先で何を云つて来たのだへ
へイ仕合せとね留守でした

○耳はない

毎日時を違へず豆腐屋が豆腐くんと賣る聲に、娘一人ズツト出で、「豆腐屋さんく」と呼
べと聞へぬにや賣り行くに、傍から男の人飛んで出て、大音上げて、「チーイく豆腐屋、
耳は無いか」といへば、此聲聞へしにや豆腐屋振り回り、「ねおいにくさま、今日は耳は内
にをさました」

○正直

某寺の和尚一日小僧に命して二個の餅を買ひ來らしむ、暫時を經、小僧歸り、餅一個を
和尚に渡す。和尚曰く、一箇は如何せしや、小僧默然、和尚怒て之を叱し、更に詰問す、暫く
ありて小僧「斯く致せり」と云ひながら又其餅を食す、和尚呆然。

○穴より見て穴をいふ

或る男が自分の内の障子の破れ穴から向ふ隣家の障子を見て「向ふの内は無性だ寒くな
つたから早くあの障子の破れたを貼ればよいに

○駕屋の晝寐

昔或る人駕に乗り道中す輿丁互に大聲にて前日の客は云々にて大層酒代を呉れたと繰返
しく客に聞こへよがしにしやべる客偽りぐらく騎をかきて狸寐をなし暫くにして輿
丁の咄止むを待ち目を覺まして時に駕屋我れが昨日乗りし駕屋は實に心切な人にて云々
語り出せば輿丁二人どもぐらく騎をかきながら足を速めて行きしと

○貧乏大黒

大黒様を日頃信仰して、一生懸命福徳圓滿と祈りましても、サツパリ御利益が御座いませぬ、
親爺大層立腹して且コレ權助、此貧乏大黒の信仰も仕飽きがした、とこでもよいから
打捨つて來いと、言ひ付けて遣りましたが、ヤガテ歸いつて來て檀旦那の仰せ通り打捨
ろふと思ひますと、丁度通り掛つた人が、譲つて呉れと申故、よい幸と心得、十錢に賣つて

参りましたト自慢らしく申すと、やに下りにくわへた煙管を取つて社に搦へ馬そんな事だと思つた、アノ貧乏大黒め、己れの家を出るとすぐに、人の懐をいたためやがる

○傍敵艦の往へ

同軍艦の往へは如何なりしが各新聞にも之を論じ其筋に於ても百方探索されしが遂に見當らずと聞及びし所此頃稍やく其所在を發見したりと云ふ何處に在た、ヘン龍宮の裏門に

○大繁昌の商賣

東京兩替町の安井紋太郎と云ふ商人が此頃開店せしに起るから寐るまで店頭人の山を築き賣てく仕様のない所から遂に閉店して夜逃したりと云ふ、そんなに大繁昌して何故閉店して夜逃まで仕たらうそれでも飯を食ふ間もなく体だ續かなければ是非がなひ一体何商賣だ一錢銅貨を天保で賣たのだ

昔はなと

○下手淨瑠璃

十返舎一九戯著

ナント一段語で聞せよふか友達「イヤくさまの淨瑠璃只では開れねへ鰻でもれざるなら聞てやろう」チ跡で何でもれざるからさかつせへとやがて語り出せばみなく「コレハ迷惑跡でのれごりは虫免だど残らず歸りたるも知ず一段かたりしまいて「ヤア皆歸てしまつたかコリヤ儲つたモウ一段語るべし

○貞男

同

れらが女房はさりやうもよい上に實があつて夫はくれれを大事にしてくれる余所へ行ても歸りが遅いと案じ暮しれつて寒いといへば巨燵でさものを煖めてくれる暑いといふとわはいてくれるしよつばどれれには惚れて居ると見へるから已れも又可愛くてならねへとはなすうち鼻毛だんくと延びて壹尺はどながくなれば友達「チャく主の鼻毛は今のかまにながく延びた見どもねへから抜てしまやれといふとカノ男「イヤぬくめへ内へ歸つて是をまた女房によませて樂しむと歸りずつとはいれは女房「チャれめへのはな毛はなんだへばからしいナせぬきなさらねへわつちやモウくそれであいをがつかはてた

貞男之相

貞女不見兩夫貞
男兩妻にまみへた
くてもこのかほではま
みへるわいてがござり
ますまいみなさまなん
どればしめす

相書曰 雞頭望大
海姦淫之相人中
同牛小便長則
是間拔之相なり

「れめへのはなの下はなせこんな
にながいのういつそばかく
しくもなんともわり
ませんよ



盗猫

餓を料理している所へのら猫が来りチヨイと一ト切食へて逃げるコノ蓄生めと追かけそ
ふにするを友だちとめて「コウウつちやつてれきやれ幸ひの事だアノ猫めがあれを食
ふだろウからわいつめに毒味をさせ猫が別條ねへよふな事なら夫からこつちも食ふがよ
いとやがて鍋へ入れて煮てしまひサア猫を見てこよふと鹿間をのぞいて見れば猫が二三
疋よつて喰つて居るゆへサアしめたものだわいつらか別條ねへよふすだと打寄て手もり
にしてやりこれはうめへ〜といふこゑを聞て鹿間の猫「サアもうよいから喰やれ〜

忠臣藏十段目

振鷲亭主人

丁雅伊吾あつらへ置し夜うちのしやうぞくの直段を呉服屋へ聞きに行き直を聞けば五十
五兩といふ面倒ながら書付て下さいといへば手代がいふには五十五兩が覺へにく〜ばッ
レ指を五十兩よ又こちらの指をれつて五兩と覺へてござれといへばチツトよし〜どの
み込み山と兩手をにぎつて立出しが又立もどりモシ〜どうぞ是二兩まけてくれまいか
「ナゼ〜」是では戸がわけられぬ

三題 噺

○揚屋 盗人 踊り

大水道 狸鼻

博多柳町の揚屋へ罷だらけの盗人が振身で這入り寐て居た小女郎を犯したさうだトヨ
○ オヤ踊り込みの強姦か「ナニ貝(海)賊だワチ

○目貫、盗人、稻村

色川岸 うかれ

歌舞伎に目貫五斗狂言に花盗人觀世には稻村皆夫を振り事のある作意の妙案は感心ダ△
コレく目貫五斗や花盗人は見たり聞たり仕たが本行に稻村と云ふ名がある物か「ハテ
夫でも野(能)の中に有るものナ

○盗人、安泊り、目貫

梅亭 初春

昨夜はどんだめにね逢たさうで△御深切に有難ふハイ僕の内て寶物ども云ふべき大切な
品を○〜ユ！夫では御内室でも取られなされたか△イヤ〜先祖代々から持傳へた鑿屋
宗半が彫の一輪牡丹の目貫ナ○ナアール程いつやら拜見致しましたシテ盗人の手掛りで

も御坐りましたか△御安心下され警察のね蔭で今朝手まはりました○夫は結構シテ何處
デ△南の安泊りとやらで○さういふ處に寝泊りをする奴なら定めて代呂物は賣こかして
仕舞ましたらふーイヤ〜其處の家にさちんと仕て△りました

字はなと

○人の力を省く工風するが發明の第一の功

關出瓢子

○定めて金子入の箆筒と見えて錠を押し

越後雪の本

○其様に偽ばかり云ふてはいけぬ些トハ人の爲をも思ふがよい

葦陽念娯苦齋

○モン旦那御都合迄如何さま「ナニ我輩は車に乗るべき身分に非ず

千葉一二散史

○無沙汰の詫言をいひに今朝から方々の友人を訪ふた

醉月連春の家

○耳を定めて腕ト聞きな

西小林馬井

○培養して利のある木は梨サ
○彼の人は大いゆゑ重い物を動かす

二八
廣島白面書生
五月 蠅

國名一口咄

○色なら娘より
○ア、退屈ドレーふく
○ね糸サン織マスな能い
○コレヲ病の貼紙何れも
○坊ヤ魚を遣る持て来イ
○此絞は鳴海かなイヤ
○八公青イ顔して居が何病シヤ
○向ふに白ふ見へるは何シヤへ

波 周 志 紀 天 豊 肥 隠
島 防 摩 伊 鹽 後 前 岐
大澤 白徳齋

○あなたの坊チヤンは何歳シヤへ
○學校へ往何習なさる
○權助サン以て来てれ呉
○豆絞りの手拭は
○夏の夜はうるさいよ

陸 丹 出 壹 加
奥 後 羽 岐 賀

世帯道具一口咄

○椀洗ひを最ひとつ買ふか
○此れ手鹽は一度支ツたのかへ
○餅蒸籠は大釜へ掛るのですか
○醉醒めに呑むぬる茶か底に
○隣ふいて居る肴屋の顔は

桶 皿
茶瓶 大曲 突
白 木 黒 白
出 刃

○もへつかぬので下女が舌を

○向ひの拂ひはまだかへ

○さすがに三丈けで髪が

○下女の鹿相で井戸へねとした音

薪 炭 土瓶
たはし

滑稽頓智

○何だか妾も知りません

越後小一休

或る下宿屋に書生止宿してありしが晝飯の時、ね皿にね頭附の魚ありどうやら古みたるもの、やうに見受けられしかば書生は之を食はずして下女の見て居る機を見て魚の頭部に己れの口を附けしが下女は不審しみなた何をなさると云ひますと書生「實は余が友人にて三四日以前海上にて乗込船の難破に遇ひたるものある故今此魚に知らぬかと聞きしなりと答へますと下女は魚が如何答へましたと問ひ返すので「魚の云ふには拙魚は十日以前に取られました事故更に知りませんと答へたよ」と云へり……下女赤面して

○肛門未閉

遠江 江東 散士

支那坑人に三人の婿あり丈人一日駿馬を得て歸り三婿をして其の速きを形容せしむ第一婿の曰く

活火上置三鵝毛一丈人乗馬到三會稽一騎去騎來鵝毛未燃と丈人善と稱す第二婿の曰く

水上置三金針一丈人乗馬到三餘姚一騎去騎來金針未沈と丈人また善と稱す第三婿は更に

良案を得ざるが如く茫然としてありしが丈母忽ち一屁を撒す三婿忽ち曰く

妓撒二一屁一丈人乘馬到三姑蘇一丈人騎去騎來孔門未閉

と一家相顧みて呆然たり

○アレ盗坊と喧嘩止み

羽後 荒川 關岡

夫婦喧嘩といへば茶碗が飛び土瓶が破れ其處で小供が泣き出すといふが一定の相場なり偶々通り合はした一人の男は物をも言はずスカクと内に入り將に用篋の中へ手を入れんとす此家の主人一聲高く盗坊と呼はり女房打捨て走り寄れば其人徐に謂ひて曰く盗坊にわらず君等の喧嘩を止めんが爲めの計略なりと二人を諭して去る

○魚屋得藏

獨 笑 子

日本橋邊に得藏と云へる一人の魚商ありけるが、或る日例の如く荷を擔ひて市中を賣り歩くに、如何なしけん彼方より來れる二人の武士に突き當り、武士は仰向に倒れていたく衣裳を汚し、腰骨を強く打ちければ、大に怒りて汝魚商の分際として無禮にも武士に突き掛るは、奇怪千萬なり、覺悟をせよとて罵り騒ぐに、得藏は大に驚き、此は失禮仕れり、粗忽なれば何卒御容し下されかしと謝れど、一向に聞き入れず、是非一命を申し受けんとて動かねば、得藏は困じ果て、如何せんと躊躇ふに、四邊には黒山の如き人立にて、がやくと罵り合へり。得藏は覺悟を極め、最早致し方なし、然らば御對手申さんどて、天秤棒を取り上げて武士に向ひ、暫時御待ち下されとて、大音揚げ、汝等人の喧嘩を面白氣に集まりて看物することを顔憎けれど、言ひも敢へず天秤棒にて稿き立つれば、看物は蜘蛛の子を散らすが如く逃げ走るを、何所迄も追ひ立く敷町行きて漸く後を振向き、阿房武士よ、我は此所にて御暇致さん、後で緩く看物の泥でも拂ひ給へと云ひ捨て、何所へか消へ去れりどぞ。

茶 番

○月 見 景物桐の箱入猪口 但し草花の模様

さて私 はれ月見と申題でござり升が秋もだんく月見頃になり升と桐の木なども一葉をち二葉をちこのよふになり升と云い景物の猪口を見せ一月は此桐の木の中からさし昇り升實に三五夜中とやら申まして光りかやく満月誠にわざやかな者てはござり升といひながら猪口を取り出し見物の方へ見せ「秋の空でござり升れば斯く薄雲などもかゝり舛と猪口を包みたる芳野紙を見せ「しかし月はくまなさをのみ見るものかはと徒然草にもござり舛れば是も又一としはの思ひ舛此節は草花などもいろく咲き乱れてト猪口の摸様の草花を見せ「さまざまの虫も面白うなまますると箱をたゝき「則ち是か桐くすの聲でござり舛ト又猪口をはちきりんくくと松虫の聲もいたし舛扱かやうに月もてり出も鳴きますと亮になつた箱の中を見物の方へむけて「はらんなさりまし中秋の景色でござり舛

○駕屋 手あらびのかごに
きつまいもを入れて出る

私は駕屋と申す題を取りましたゆへ駕屋になり品川の大木戸へ出まして客を一人乗せて参りましたト駕の垂を上げてビツクリしチヤ是は大變れ客がさつま芋になりました是にはしさいがかりましやうア、わかりましたれ客がさつま芋になるはづてござり舛れ乗せ申す時へイかぞやへイかぞやト申ました

○松竹梅

さて松竹梅の茶番を手みじかに忠覧に入れ舛とかんぞくりの酒を猪口へついで一ト口呑み是は大變あつし少し冷酒をさし舛といひながら外の酒をさし則ち是がむめますさけでござり舛

○千本櫻 景物茶わん、一升樽
ふるしきへつみて出る

さて千本櫻と申す題でござり舛ゆへ是へ初音の鼓を取り出し忠覧に入れ舛と風呂敷の中より景物を取り出し見てビツクリ「ヤア是は初音の鼓と思の外一舛樽と茶わんがござります肴がなければコンくの盃でもあるまいハ、アわかつた肴のないはづだコリヤ狐たゞ

のむだは

○鶴龜 丸いざるへるはを
盛て出る

さて鶴龜と申す題でござり舛ゆへ鶴龜をほらんに入れ舛是へ持出でましたはかめのござるでござり舛處でそれはなんだとれどがめもございませうが是か則ち鶴でござり舛かやうにはしではさみ口へすゝり込舛とつるくくくト申ます

地 口

○娼妓急げはまた遣らぬ

障子一重がま、ならぬ

○鶺鴒笛で舛登る

遣ひはたして二歩のこる

○縣々蠶に業もふる

テンく太鼓に簫の笛

○わづかの金にも証券し

流石の武智も仰天し

○一台辨當たくついで

持統天皇春過て

○此子困り母のきづ

小野小町花の色

○商法勉強たる金

○車牛流行

○ね立か夜中ど宿姫あわて

○酒の半に飯の沙汰

○返辨勘定も済む

○謠ひはやして妓婦ねどる

○愉快三味線上等妓

○粟のいさこも砂糖つけて

○さわぎのたへぬ三朝樓

○非人足袋なし足袋をやり

○密かに嫁の仕に行放屁

○定めて夫れは隠し妻

○椅子かけなれし書生たち

○夫程せつないこと乍ら

僧正偏照天津風

つるまむし入道

ねかしかね隠の顔見て笑へ

阿部の仲麿天の原

千年丹鳥の鶴

つかい果して二分残る

向へ三間雨どなり

またもみやこを迷ひ出で

たましひ返す反魂香

地震 雷 火事 をやぢ

いろはにはへどちりぬるをわか

濱邊で月は明石須摩

水上かねし風情なり

嫁ごの煙たい者は老婆

絶倒笑話

○證主人

一士人至洋貨舖。購葡萄酒。問價幾。于買答六十錢。士人曰。嚮問主人。答五十錢。你所云甚過當。宜呼主人。買云。本舖主人乃我士人。不肯強之。買益證主人。尙強不止。買憤其被奴僕視。把葡萄酒壘。投地。上碎焉。曰。客請看。尙未主人乎。

○散屁婦

有能散屁婦。其夫戒之曰。你見請人。臨席。若散屁。膺手於臂。握之。須而放。恐莫臭氣。婦奉教。一日親家有嘉筵。婦至。望屁將散。仍如教。右手握之。親家不知。進杯。婦受開手。音噴。嗚々々。

○盲人誤聞

幸手 得月 釣人

有^リ一^ニ盲人^一。其妻夏日爲^メ割烹^ノ。火煽^テ於爐^ニ。誤^テ而燒^ク指^ヲ。乃大息大叫曰^ハ。大熱^ク々々。盲人隔^テ席^ヲ。遙^ニ聞^ク之^ヲ。曰^ク。可見^レ。可見^レ。余平生嘗^テ不言^乎。大暑^ノ之節。必^ス可^カ冠傘^也。

○代疹

一^ニ人^一寅夜^ニ。請^フ疹^ヲ。疔^ヲ。醫師仍^レ有^ル事^ニ。命^シ門生^ニ乘^リ車^ヲ。往^テ代疹^シ。路程一里。強門生倦^ミ。疲^レ於車上^ニ。打^レ眠^ル。已^ニ到^ル車夫高叫^ク道^ヲ。請^ム事^ヲ。門生驚覺^シ。曰^ク。應^ズ々々。

○問^ニ希望^一

有^リ下^ニ問^ニ兒^一之望^者。先^ツ問^ニ長子^一。你望^ム何事^ヲ。曰^ク。冀^シ得^ル志摩羅山^ヲ。以^テ爲^シ枕^ト。父喜^ブ。其廣大望^也。又^ニ問^ニ次子^一。曰^ク。我得^ル太平海^ヲ。以^テ爲^シ洗足^ト。父益喜^ブ。又^ニ問^ニ季子^一。曰^ク。我無^シ敢^テ望^ニ。唯^ニ欲^シ得^ル馬^ト與^ル鹿^ト。冀^シ三塊^ヲ。二兄大笑^シ。父亦失^ス望^ル。問^ニ之^ヲ。曰^ク。你呆子^ト。得^ル冀^ヲ爲^シ何^ト。曰^ク。一塊^ヲ與^ル喜^ヲ。開^ク子^ノ之痴言^ヲ。父親^一一塊^ヲ付^テ云^フ。志摩羅山^ノ者^ト。一塊^ヲ食^シ。說^ク太平海^ノ者^ト。以^テ欲^シ醫^シ白痴^病。噫^ト。

○自惚

朋友相會^ス。一人曰^ク。無聊^{ナリ}。宜^ク釀^ク金^ヲ。呼^ブ葷^ヲ。素^ヲ。皆曰^ク。否々^ク。有^リ大食^ト。與^ル小食^ト。不^レ平^{ナリ}。寧^ク命^ヲ會^ニ中^一第一位^ト。好^シ男子^ヲ。請^ム之^ヲ。便好^ク。有^リ末席^者。性最^モ自惚^{ナリ}。聞^ク之^ヲ。叩^ク頭^ヲ。曰^ク。困^ル却^ク々々^ク。

○竊盜

有^リ賊^一持^シ兇器^ヲ入^リ醫家^ニ。要^シ呈^シ金錢^ヲ。醫師乃把^テ刀^ヲ圭^シ與^ル之^ヲ。曰^ク。你要^シ金^ヲ。沒^シ有^ル。金^刀圭^ヲ猶^ホ金^ヲ宜^ク受^ク。賊見^レ之^ヲ。吃^キ一驚^ヲ。叩^ク首^ヲ。逃走^ス。醫師追^テ之^ヲ。問^ク其故^ヲ。賊曰^ク。汝^ノ之刀^ヲ圭^シ可^シ怖^ル。從來^ニ殺^シ幾^ク人^命了^ル來^ル。

○啜粥

西京 葛原 醉史

一^ニ老人^一至^リ基會^ニ。正午^ニ。僮僕來^テ曰^ク。茶粥^ヲ已^ニ熟^シ。老人歸^リ馬^ヲ。僮僕曰^ク。你愚^カ狀^ト。人前^ニ云^フ。茶粥^ヲ與^ル耻^ヲ。乃酷^ク懲^ル。後^ニ來^リ已^ニ而復^ス至^ル基會^ニ。晚來^ニ。僮僕再^リ至^リ曰^ク。喫^シ晚飯^ヲ。老^人心在^リ基^ニ。不^レ應^ズ。僮僕再^リ三^ニ云^フ。老^人不^レ動^ス。曰^ク。你去了^リ直歸^ル啜^ル。

○僕誤^レ語^ヲ

得月 釣人

一^ニ老人^一臨^ミ會^ニ。席^ニ將^テ歸^ル。而呼^テ僕^ヲ曰^ク。僕乎^ト。僕乎^ト。僕笑^テ謂^ク友^ヲ曰^ク。僕之主人淺^ク。

學不釋漢語トオカシイナラ僕者是遜稱自己トオカシイナラ君者是呼稱他人トオカシイナラ今主人呼吾輩曰トオカシイナラ
レ僕可笑焉

四〇

滑稽手紙

○茶會に友を招く文

頓珍漢問拔

其後は茶へて御無沙茶致しれ茶會に膿だとも潰れたとも何とも云はず丸で唾同様の交茶
意にて打過候へ共奇家一同相變らす南京米の粥を喰つて虫の意氣で居られいやは先以て
目出鯛無い事と奉存 拙者は毎日起きたい時に寐寐たい時に起き鯛のれ刺身鯉の吸
物地震の浦焼に虎の丸焼贅茶苦の仕放題で相暮し居る處本日茶會相催し度以間戯兄也
多忙なれば早刻に來茶苦茶洒落度候へイ茶用ナラ

○下戸より上戸へ異見する文

○上戸より下戸へ返事

○いかに上戸乗さ、玉へ
いけんといひていろはうた
ろくなことかどよみたれば

○はやくも合點いたされよ

はらすぢ痛きこといもを

○にがくしきはさけのくせ

につこらしげにかきちらし

○ほんしやふまでもどりちらし

はね折なされしかみついる

○へいせいよろしき人からも

へたな長文よしなしと

○ど方もなきはなまゑひぞ

どくく返事申すなり

○ちへふんべつもかきくもり

ちゑある人はさけをすく

○りはつな人もぜんになり

りふはくそんを始めとし

○ぬきみぐるひのわふなきよ

ぬしある人もき、玉へ

○るいを求めてよをあかし

るい代其名のたかき事

○をさへつしいつ日をくらし

をもへば上戸のはまれなり

○われをあしきとれもへども

わが日の本ならはしも

○かんにんならずよひつふれ

かみはみきにてまつるぞや

○よいとし、てもつくさる、

よろこび祝ひことぶきは

- たわいせふねもあらばこそ
- れいぎ作法もとりわいて
- そでない事をこねまはし
- つねのこゝろは入れかわり
- ねじつこじつのむりやうに
- なきつわらひつくだをまき
- らん酒のはては喧嘩する
- む性の費へねほきゆへ
- うとくな人も貧になる
- ゐるいきるいもなくなれば
- のみたをれとは申すなり
- ねんなはこゝろにみぐるしや
- くちはしたなくしやべりつ、

たれもさかづきとらざらん
 れいぎは酒のしだいなり
 それのみならずよしつねの
 つき見花見やゆふすゞみ
 ねんき佛事や祝儀ごと
 なくてならぬは酒ぞかし
 らん舞音曲淨るりも
 むねんむそふのげんきにて
 うさもつらさもわすれはて
 ゐのちをのぶるこのくすり
 のまぬは何の因果ぞや
 れんなはこゝろせまければ
 くるふきづかいつもりつ、

- やさしきこへも高くなり
- まていな人もぞんになる
- けしからざりし大笑い
- ふぎなる事のいでくるも
- これ皆酒のしわざなり
- おひてよろめきかへるさは
- ておしを人にひつばられ
- あさましかりし休たらく
- ざしきの内のありさまは
- きたなしむさやど人々に
- ゆびさしそしり悪まれて
- めひき鼻曳き笑われる
- みはやまひつき内をんじ

やまひとなるもこのさけは
 また事もなきくすりぞや
 けんかの中をなをすこと
 ふゆのさむさをしのぐにも
 これ皆酒のきせくなり
 おひてたまのきやふがいを
 てんじかへたるたのしみを
 わはれやしらぬ下戸衆は
 さげのざしきの片隅に
 きふくつぎかな身をちいめ
 ゆるせくどてをすりて
 めいわくしごくなためいきは
 みるめもかゝすしやふしさよ

○しするときは後悔す

しかもさかなは人なみに

○ゑきはすこしもなかるへき

ゑりきらいなくきこしめす

○ひんばふするもこれゆへぞ

ひとまじわりをするとても

○もはやこれから禁酒して

もちでしかきかなるものか

○せいもんたてゝさかすきを

せめてをりくゝふたつみつ

○すきと手にはどるまいと

すはれぬこともわるまいに

○京からつゝしみ玉ふべし

京から修行なさるべし

うたに

うたに

「生酔と人にさらはれ酒すまれ

「よいくとはやすみこしも酒機嫌

身銭を出してすへはよひく

正味のわじをしらぬ下戸めら

秘事魔告

○寝てゐて喰れる法

人間は生てゐる爲に喰か。喰ために生てゐるかの七八釜しい問題より。現在喰れない人間の多い中へ。寝てゐて喰れる奇法を報せるのだから強氣で坐らう……サア來ッしやい。來ッしやい四千萬の兄弟ハドンく來ッしやッて奇法を娛樂なさい……ト此位な冠詞で仕舞たいが。然も忝りませんから。別天地の愛讀諸君だけへ極内々で傳申します奇法と云ハ……先づ寝てゐて喰れるとを北海道の深山中最も熊の多い處へ往き。コトリと寝てゐると熊や狼に喰れると受合……ナント

○唾壺から蛇を出す傳

煙草を半分吸ては唾壺ヘタ、キ込。半分吸てはタ、キ込五六吹に至りし時分エヘン……オホンと唾をはき込と……ソラ……ジャくくくくくくくくくく

○一ツの帽子を千人の頭へ乗る法

帽子一ツあれば千人の頭へ乗られるゆゑ。貸禮服の營業者には素敵滅法界に重寶でかな御坐らう……と申す法は先づ禮帽子でも鳥打帽でも何でカンでも一ツの帽子を千人の頭へ乗んと思は。其帽子を黒焼にして糊にて練交之を紙へ紳し小さく切て千人の頭へ……

○星を撲き落す法

此法は成たけ長さ竹竿を持って屋根へ昇り無法に空を拂ふなり。而して未だ星に届かざれば幾干でも竹を續くべし……續いで續いで無法に續いで未だ星が落ざれば星が怖れて天上にシツカリとまつてゐるなれば其時は竹の先へ繭を附てさして取とぞ知べし。但し此にて落ざれば未だ竿が短かいと知るべし

○眼尻を逆あげる奇法

兎角眼尻の下てゐるは助兵衛の證據にて御婦人方に嫌るゝゆる。之を逆しあげて女の子に好れんと思はゝ下た眼尻の上を一寸許り切り三針ばかり縫ハツラ……ヒツつけで釣し上り……イヨ音羽屋——と賞らるゝと保證附なり

○酒嫌いにする法

酒は禮に始まつて乱に終ると申しますから。甚だよろしくない物とは百も承知。二百も合点……三百は懐に仕舞てゐる譯で五猿が此も交際上の一ツでと遁辭して飲で……へ

レケになり。へレケから游廓へ切込……乱暴狼籍……親御様も度々御心配になる次第です。るから若し御子息様を酒嫌いに仕やうと思召は先づ御子息が岡惚て居ると思ふ女と牒通せ……合点させて女に斯云せるのです……何處の何屋の誰さんはオホ、妾はアノ……何ですが御酒を召上るから妾しやい……と觸るかせるとサア子息先生。アノ別嬪は已に惚れるに違ひないが。只だ已が酒好ゆせ嫌ッてゐるのだ。ソソなら以來酒を謹で見やうと惚て貰いたさが一心に。五日飲ぬ……十日飲ぬ……一月二月……仕舞に……

○夜る眼の見へる傳

如何なる闇黒でも書物なり新聞なり讀んど思はゝ玻璃で造へたる下が平面にして大きく中が細く而して上部が圓くして空虚なるランプと云物へ。山から出る石油と云物を注ぎ入れ。此へ木綿にて織たる平ツたき心と云物を入れ而して寸燐と云物をコスリて火を發し右の心へ點すればパツと燃わがる。底でホヤと云物を冠せれば如何なる闇黒でも日輪様と同じ光りが發してチャムと何でも譯る……

○内外の勳章を貰い而て金持になる傳

如何なる身分の者でも暫時に勳章を貰い其上に金持にならんと思はゞ。日本へ外國の皇族が御漫遊になりし節。二人牒合せ一人は津田三藏の二の舞をやらかし一人は車夫の市公か治三公の形で相棒を切限れば忽ち：ソラ勳八等に三十五圓の外國から一千圓の年金とは嘘ぢや御坐らぬ……………然が半分は津田の眞似した棒組に遣ると心得屁し

○長く生魚を蓄ふ法

先づ魚を捕へ差渡し二尺ばかりの鉢へ水を湛へ。之へ其魚を放ち。絶ず子子を與へ折々水を替へて遣ば二年も三年も蓄はへらるゝと受合なり……………オイ／＼それは金魚ではないか。ヘン金魚は生魚では有ませんか。馬鹿面奴が

○夏大雪を降す法

暑中到大雪を降して駈しき寒氣に逢んど思はゞ暑中に入る十日前にアイスラント近邊へ旅行すべし三伏の熱さと云ふ時分に雪がバラ／＼……………ア、菟棒に寒い湯豆腐で一ハイ……………エ、ブハ／＼

○眼を引抜れて痛まぬ傳

巡査や探偵の決して入ざる坐敷に於て金錢を賭て入々なり奇偶なりやるべし。巡査や探偵は如何はゞ眼を抜るゝも……………

○男女ども肌の色を白くする法

色の白いは七難隠と申しますから。男女ども色の白いは情の淺。戀の瀬戸では頗ぶる附の入用と思はれます。なれども青瓢箪の子孫の日本人は勿々急に色が白くはなりませんから誰可でも色の白いとを願ひませう。底でて記者は大急ぎで色の白くならず薬法を教へますから試なすつて娛らうじませ

○雪の糞 三百 匁 ○白鳥の眼の玉 五百 目

○月球の光 二百五百 目 ○晒し葛の粉 百 目

右四品を上々精々米一石焚て糊としたる中へ混交差渡一尺の丸藥と作毎日五十粒づゝは必服すれば屹度色が……………但し碎て呑では効か有ません哩

○人の心を看破法

突然拳骨でハリ撲り。撲ても黙ッてゐる人は氣の好人なり。腹を立て怒り出す奴は疝癩持なり。……ウア〜と泣出すは氣の弱い男と知るべし。ナンと怖ろしい法でかな御坐らうが

はうた評釋

屋氣樓主人

古へ聖人の國風を采る鄭衛と雖も之を捨てず所謂都々逸端語は即我の國風なり而して學者或は采らず顧みて葩經を佩誦す蓋し擇ふ所を失する者といふべし都々逸は輕淡直ちに性靈を吐く一語其意を了するを得唯端語に至ては紆餘曲折措詞愈々妙にして命意益々險なるものあり是を以て傳者往々其詞意を謬る乃ち之が辭釋を作ると云爾

○夕ぐれ 本調子

夕暮の。ながめ見わかぬ隅田川。月にふせいをまつち山。帆かけた舟が見ゆるぞへ。アレ鳥がなくどりの名の。都に名所があるわいな。

花哇一夕話に云、友人鷺聲曰、狂言作者篠田瑤助の話に夕ぐれは故人松本高麗藏、初上坂より下りの節かゞみ山岩藤を勤一折、岩藤部屋の段のうしろに唄ひ一文句にして、もと上方にて出来一語なり、されば今鳥の名の都といふ文句を、いさ、かうたひ誤りて、さま〜の説をまうくれども、もとは「アレ鳥がなく鳥の名に都といふ字があるわいな」

是にて文句の曉わかりつべし云云、又云、ある人曰く「都に名所があるかいな」下いふべし其はわけ、すみだ川の如きけしきの所が都にもあるかといふ意にて土地自慢の文句なりとす爾もあらんか云云

右にて明かなるべし但し待乳山を月を待つことに言ひかけたれば詞の上よりいふ時は月の風情をといふ方正一かるべし

○黄鶯兒 同

誰そや。アノ花ふみちらす鶯を。いなせてたもれ。鳴かすなよ。なけばぞしづが目も合はず。戀しき人を夢にだに見せぬわいな。

是も亦唐詩選に出でたる打三起黃鶯兒、勿レ教三枝上啼一、啼時驚三妾夢二、不レ得レ到三隴西一、といふ詩を秋山玉山先生の譯されしものなり、されど此ま〜にては今の曲調には合ひ難かるべし

○花の曇 同

花の曇りか遠山の。雲か花かはしら雪の。中をそよく〜ふく春風に。うき兼さそふやさ浪の。こゝは鴨も都鳥。扇拍子のざんざめく。内やゆかしさ。内ぞゆかしさ。

都鳥の名は早く伊勢物語にも見ゆ學者たちの説も種々あれども鴨の一種といふを穩當なりとす榮平朝臣が「名に〜」の歌より隅田川隨一の名物とはなれり、こゝはかもめも都鳥といへるによりて見れば隅田川をいひたる詠なすべきは何處よりながめたる景色か〜らねど遠山の雲か花かとは、ふさは〜からず菅野山などの花を遠きより見たる時こゝろ、さはいはれ、扇拍子の以下は堤上酒樓の趣なるべし

○八重一重 三下

八重一重。山も臍に薄化粧、娘ざかりはよい櫻花。あらしに散らで主さんに。逢ふてなまなかあど悔む。耻かしいではないかいな。

春の山の淡く霞みこめたるを薄化粧に見立たるは即ち春山淡冶如笑レの意なるべし。されど實は娘盛りと言はんため
の冒頭に薄化粧とはいひたり娘盛りとは張船山の所謂二八ノ真婦なり之を櫻花に比したるは敢て奇構とするに足
らねど櫻といひあらしといふ語、山といふに照應せり又八重一重山もちほろにとは後陽成帝の御製九重のどやまも
幾重花の春」を暗に用ゐたりとも見ゆるなり、逢ふてなまなかあどくやむは即ち「逢ひ見ての後の心に比ぶれば昔一
は物を思はざりけり」の意なり、なまなかとはよく言ふ俗語なるがなかくにといふ雅語の轉訛なるべし

はうた

○とけて逢ふ夜(變調)

旭廓 今 様 早 狐
とけて逢ふ夜の千話口舌 勤をのけて女房氣の 互ひに末を案し合ひ 邪見にしやくの
さしつかへ アゝにくらしのどりからすかねにうらみのある同士

○浅くとも(變調)

名古屋 深 雪 時 次 郎

青柳の清き流れの涼み舟好た同志のさしむかひ颯どきへたる燈はほんに結ぶの神風や

○同

深くとも浮て楽しむ船のうち粹い同志の小酒盛互に替す猪口の數嬉しい中じやないかい
な

○同

狭くともすいた同志の新世帯人も羨む夫婦中のぞいて來たか焼きつぎやけんか苦情はな
いわい

○紀伊の國(變調)

武藏の國は兩國橋の其際に立せ給ふは柳町軒を崩へし御神燈サテ此所地の有様は茶
屋へ呼れて藝者衆が座附ね浮れ着替は後から箱やさん頼めばたれしも夫どなくサテ々
内では待であろトン／＼チキヤトンチキヤ媒人たちわひ眞關ナくらがり座しきへ入られ
て○でなしたる忍びごと

○夕暮(變調)

東雲に運動がてらの池の端邊に風情を朝冷に羽た、く鳥が見ゆるぞへアレ風が吹く花の

上風うしかぜに薫かほりがあるぞへナ
待夜半まつよはに來ぬは恨うらみの露時雨つゆしぐれ他にます花出來はなてきたかと持病ぢびやうの癢かゆが起おこるぞへわれ意地いぢわるな
辻占つじうらも待人まちびと遅しと書かひてある

○同

松浦楠翠

あふ毎ごとに。詠なめ見みわかぬ顔かほとかほ。好すなふたりがさし向むかい。うらみゆふたりいわれたり。ア
レ月つきわたる鴈かりの聲こゑ。便たより待まッ身みぢやないわいな

○雪は巴ゆき(變調)

實じつはれまへに惚ほすぎで夫婦めづめと中なかへ人立ひとたて一寸出ちよつとるにも二人ふたりづれ浮氣うはきにかへて稼かせぐのもア
レ嬉うれしいぢやないかいな

○常盤御前とこわきごぜん(我物變調)

玉山岡本美名松人作

我子わがこぞと思おもは輕かろき笠かさの雪夫ゆきつとまの遣子かたみを胸むねに手てに今若いまわかめ行いけば冬ふゆの日の風かぜの乙若おとわかすさまじく行ゆ
く身みはつらし牛若うしわかのホンす末すへをば待まつ哩わいな

○むつとして(變調)

ふつと見てねたれば客かは鼻はなの下のばしてのろい浮氣うはきのまたくれて行ゆ此指輪このゆびわならば紙弊かぢ
にしてはしや

○香かに迷まよふ(替唄)二上リ

踏迷ふみまよふ色のちまたと人ひともいふ戀こひと情なさけの廻まわし床逢とこあふて嬉うれしき間夫まがのそば笑顔はなほか見るにもなつか
しく又また馴染なじる、れ客かには世事せじにきげんを鳥鐘とりかねの別れをとめて流連りゅうれんもともに勤こめの誠まことと虚うそ
の心こころニッに身みはひとつ

○わしが國くにを(替唄)二上リ

己をらが名古屋なこやで見みせたいものは昔むかしや金城きんじやう今ステーション縣廳けんてうし市役所やくしよ宮重大根みやぢゆうだいこんのろけまい
ぞや旭廊あしたちの狐きつね開化かいけエ

○陸むつ美み(新調)本調子

東都北裡 渡邊 香女作

ささの氣きをじらすはづではなけね共とも合あたいなんどなく素根すねて見みてこま〜合書あがいて送おくら
る、合あ嬉うれしい文ふみの返事へんじさへせぬといふのも淺あからで合あわさらめられぬ合あこゝろゆへ。

○郵便ゆうびん(新調)

神港夢野畔 西岡源女作

したはしく合文のたよりはしげくと合出しては返事まつ身をは人がとや角くゆうびんと心ろで心ろどがめては合なんと合なんとこたへてよかるやら

○寫眞(新調)

浪越旭廓畔 梶川元子作

逢ひ見ての後に心ろくらふれば合あはぬ昔しがましどかし、とはいふもの、是程に合れもひ染めにし嬉しさを合何につゝまん袖たもと合移り香ならで合のこる面影

○登り下り(替唄)

函 館 ゆかりやいろ香作

めつゆるめつ三筋の糸よ、扱も氣かねなひだり襦かいな、座毎に汚す白襟も主をたよりに洗ひ張り月日立つゝ浮名がふへる、しかも素人になれもせで

○夕ぐれ(替唄)

讚岐高松 有物庵無物作

夕月の光りも寒さ隅田川波に漂ふ遊さん船小簾のうちなる爪音にアレ友を呼ぶむら千どりかよふこわ音も身にしむる

○浅くども(替唄)

京都市 官嶋百八快樓作

寒さへ知らぬ嬉しき春の閨開く屏風もちからなくなたよむ心を解かゝる雪の車て手を洗

ふ

○春の夕邊(徳永里朝合)二章

春の日永にちつれてながめにあかぬ梅やしき枝にさげたるたんざくの歌がとりもつゝゑんかいな

新富街 三舛家團子作

待に來ぬ夜はくよくと一人たのしむ辻うらのわぬ紙線のまち人もぬけて來るかどむりわんじ

花 街 美浦屋濃紫作

閨 怨

天 四 居 士 評 選

秋の夜有引○此評選載于國民之友廿八號紙上。有可愛生者。予未識其人。讀此文而評曰。卓見不得不感服。今此錄以拜知之言。

善愁多恨之人。見花而悲。向風而泣。而秋則白露冥雁。落葉凋籜。與夫月之皎々。蟲之唧々。目觸情感者。無一不爲斷腸之根。薄暮五更。仰天願影。觀物化代謝之如此速。而悟人生假幻之不可恃。誰有下不

自巧者。○此歌怨而不傷。哀而不淫。真情真摯。出以艷麗清透之趣。絕無鄙俚猥褻之意。一讀使人愴然魂消。抑我國風所謂戀歌者。概皆寄物托事。以述其衷。或興發于情而歸于道。可以教人。可以喻人。子都鳥之什。橘花之篇是也。戀歌豈啻言男女之情哉。而世之木強漢斥以爲淫奔之媒。不可與言歌也。俗謠今樣。多是閨怨詞。往々有疵瑕。不可悉採。而如此歌。則情真辭雅。亦可以比葩騷焉。

○霧之雨

さりの雨かゝりしそてにぬれつはめ一語難繪、アレ見やしやんせ鳥でさへ慣用手段。馴れしところをふりすて、しらぬ他國で苦勞して行賈逐利東西。兒をまうけてはるく、と故郷へかへるたびのそら人生之快。莫快。しほらしいてはないかい秋風上衣。群燕已去。而良人未歸。乃感物而歌。語於久旅歸鄉焉。

此歌勿々讀過。似羈旅思鄉者。再三玩味。始知是非羈旅之歌。而居人望夫之辭也。感秋風之起。而想君發揚子。見燕兒之長。而坐愁紅顏老。望群燕之去。而悲見少離別多。詞意清麗。中情悽惋。如讀李白長干行。予嘗與越中藥商同宿于確冰嶺上一茅店。藥商曰。我輩八月出鄉。明年二月歸鄉。人生強半。飄泊他鄉。嗚呼人誰不重別離。而這輩以羈旅爲性命。故園寒閨之人。愁水愁風。展眉之日少。而傷心之時多。可不悲矣哉。予亦天涯孤客。遊學十年。阿母在堂。遠勞慈懷。今評此歌。思越買之事。而悲故山之遠。歸思勃然。淚澀々下。

どゞいっ

- 寐るも手元を離しはしない好た似貌の此團扇 護寶舎順禮
- こゝろ覓ひも嬉しくかない先へ思ひの届くふみ 光姿軟史
- うらんだ鴉にねこしてもらひ勝手はたらく新世帯 ねなじく
- 遠く離れてこがれて居れど心にや人目の關もない 伊豫山中
- 羽織や遣ぬと引合ふ上でかぶり振てる衣紋掛 竹葉舎金舛

- 心合鍵隔てぬ中はたがいのしやうまで打明る
- 碇れろして浮てる中をにくい人目にかゝり船
- 彌増すうれしさ花降る思ひぬしを居續けさせた雨
- 何やはらばづかし問れる度に腹へ答ゆる子宮病
- 姑に手遅い針はめられて顔に緋裏の茜さす
- 結ふた時よりつぶれた朝の髪がをどこの氣を乱す
- さのみ不自由と思ぬ世帯かせぐ苦勞はともにして
- 馬車にひかれて善光寺参り開けゆく世の女夫旅
- 六人寄たら文珠の智慧が出よかと洒落てる二ツ一
- 元は咲かした姿も落花微塵の團子を賣てゐる
- 障子の破も千鳥のかたちまづしい二人りが浦住居
- 愛にひかれて立ち聞きに來た軒は乳花の捨處
- 調子も揃ろはぬまだ新世帯三味が坐しきの曠道具

伊勢囃々子
竹葉舍金舛
金玉汀玉舛
湖倍圓
喜圓
反圓
化圓
武圓
微圓
光圓
花圓
笑圓

- 主に探を私シヤ立てかゝみ外へ心ろは寫しやせぬ
- 親の意見は耳へのわらし目先にチラつく花の顔

○滑稽言文一致都々逸

- 昨夜便が有ましたので底でやうく落ついた
- 今に時節が最來から子短氣を出ては否ないヨ
- 夫で無ても口舌が出に種を蒔くのはれ止な子
- 晴て期した身に成たのも夢の様だどれもひ升
- 是が嘘だと取付升ヨほんどにれ前は罪つくり
- アノウれ前に妾はアノウ後はいくはくはく
- 澤山茶にしてれ出なさいヨ夫なら其氣で居斗
- 側の浮名が裂んだものヲ實に悪ッ茶有ません
- 今迄何して來無んだらう彼程約束してあるに
- 聞てれ呉ヨ悔いのだヨ又も浮氣をしたんだヨ

面白庵可笑
山閑亭景里
竹葉舍金舛

○夫どは何でも申され麻仙何卒察してモシ貴郎
 ○アレマア呆る彼口だもの虚氣何でも言れない
 ○悪いヨウ掴て遣ヨ何を爲んだアイタ、ハ、ハ、
 ○否と言程好待せたら風邪を引たアハツクセツ
 ○些御本はれ止なさいなモシへ貴郎へモシ貴郎
 ○今更邪見にマア余りなアレ、く、く、く、チヤ夢だ
 ○眞の夜中に不圖目を覺し

言葉「何か夢でも見たのかへ今時分泣て居る奴があるものか……マッテ妾は悲しいものを」

ド、二「れ前に別れた夢を見た」

○ぬしと別れのきぬぐは

清もと「すぐる袂もほころびて色香にはる、梅のはなさすがこなたもにくからで

ド、二「かいるくも五六度」

○妾が悪けりやあやまりませう

はうた「くせつて」口舌して思はせぶりな空寝入

ド、二「すねずと此方を向しやんせ」

○ぬしは民情視察のれやく

千兩帳「江戸長崎や國々へゆかしやんすりや其跡で留守はなほさら女氣の獨りくよ

く物わんど

ド、二「かわる人情に成りやせぬか

○歸る羽織のたもとに縫り

清もと「短い夏の一夜さに忠義のかける間もあるまい

ド、二「しくじりや妾しが立すぞす

○人に知られて恥かし手先

小三「此ほりものをねまへぞと思ひくらして朝夕に二人ぞしきてよまほかに

ド、二「見らりやどがめていたむ胸

菊の家 鑿

○すねてもつれし其陸言も

夏の家若葉

新権八「アレむなづくし取持酒のさゝめ言れしや別れのかねつくはさまそれがほんの色しやひいふうみいよ

下、「うつか嬉しうといた帯

○待てど来ぬ夜は心もすまず

三舛家圓子

あこや「かたちははでに氣はしはれ筒にいけたる牡丹花の水わけかねし風情にて

下、「ひとりしあんの長火鉢

○うれしい上首尾心のうちを

葛の家かつら

汐くみ「あふた其時やツイころび寐の帯もどかずにそれなりに

下、「はつかし陸言かたり合ひ

○逢ふて嬉しい身に引かへて

蓬萊家梅河

朝かほ「たまくわひは逢ひなからつれない嵐に吹分られ

下、「かへす心になるつらさ

○山の笑かほに浮立のどか

知理通亭三味成

翠唄 山さくり「春の心にさそはれて花の下ひもうちどくる契や昨日けふはまたれもりぬかたの山風の吹にまかする花の枝

下、「空もいとゆうはるかすみ

○こゝろ隅田の詠めに飽て

北州「松の位を見かへりの柳さくらの仲の町いつしか花もちりてつとん

下、「またも廓の夕そよぎ

○ね顔三うらやト思ひこみ

梅曆粹丹通客

新権八「鳥がなくあつまの水になれそめて花のかげくむながれのくるわふくむいろ

かの

下、「そめた戀路の小むらさき

ねこがましくも かりの舞臺 ○辨天娘男女白浪

れいろれんし 三升家圓子

○さどらぬわたしの心の宵を

(菊)知らざア言つてきかせよう濱の真砂と五右工門が歌に残せし盗人の種はつき子一七里か濱其白浪の夜働らき以前をいやア江の嶋で年季つとめの兒が淵江戸の百味薄錢を當に小皿の一文字百が二百と養錢のくすね錢せへ段々に悪事は昇る上の宮岩本院で講中の枕さがしも度かさなりね手長講と札附にとりく船を遣出され夫から若菜の筒もたせ爰やかこの寺船で小耳に開た祖父さんの似ぬこわ色てゆすりかたり名さへゆかりの辨天小僧菊之助といふ小若菜(左)其合ずりの尻押は富士見の間から向うに見る大磯小磯小田原かけ生れが漁師に浪の上沖に懸つた元舟へ其舟玉の垂せんをぼんと打込捻旋舟丁半の側中を引渡つて来るかすり取り板子一枚其下は地獄と名の呼ぶくらやみも明るくなつて度胸が摺り櫓の押借やぶつたり舟足たもき凶状に昨日は東今日は西所定めぬ南郷力丸面を見つて貰ひやうやう

○逢うてしつぱり涙の雨に
下、一「わかしてうれしい今日の首尾
れいろ戀師

双六「その振出しの袖の梅昨日のまゝの二日酔わか師の聲にねこされて心うきた
つ引染に
下、一「はれてうれしうたつ霞
誰香梨正子

○思ひ染たる
小三「いろはかはらぬ戀中を
下、一「人がとや斯邪魔をする

芝居狂言讀込都々逸
新富町 三升家團子稿
黒田屋龜吉

○初會の時治郎可愛れまへ
(明鳥) さつと浦里まつわたし
新若菜屋桃太郎

○れ顔みなづる迷たわたし
(菊畑) 色よいへんじをさく畑
れなじく小壽み

○首尾も義むら此とき姫と
(三代記) つもる話しを三代記
れなじく花子

○心ろの駒澤狂ふたこの身
(朝顔日記) ね顔みゆきの最初から
れなじく丸子

○縁の糸萩いつしかむすび
(二刀額面) 風呂場で嬉しう温の幕
はしもとたま子

○こがれ待つ身の心も白井
(夢吉原) みのたよりも小紫
六九

大津繪節

花月情史

○美人の體を四季に見立れば花の顔立柳腰笑ふ口元梅の花五本の指は白魚よ涼しき齒血に立ば芍薬すわれは牡丹三日月形の眉の毛や眼にもつ涙露の玉朝顔の垣に身を寄す風情なり髪のはつれはこからしの跡は奇麗の雪の肌

○眉毛落して間もなく髪はこわされかゞし折られたゝいて腹がいたらば思ふさうぶんしやさんせしかしれまへのかんしやくが余所で出ようかと案しられ格氣もふつよりやめました機嫌なをしこちらむいてくださんせと目に涙あなた好といだきつかれて何さらすと云ふても心の内ではどんなに嬉しかる

○入道清盛ひの山ひ山ひ登るは石童丸まるい玉子も切よで四角しかく浮世は色と酒竹に雀は仙台さんのごもんくはどこいゆく油買に茶買山から谷底を見れば見れば齒の爲目の薬り薬峠の権現さまこそねこのかわ

○夕暮に小船でいそがして土手の景色は萩桔梗露は尾花か鳥羽玉のアレ見やしやんせ辻占を松葉かんざし疊み算ふけて逢夜の氣苦勞は忍ぶ戀路のはてはかなさよ男心はむぞらしいくせつして屏風は戀の中だちか今朝の雨どはかへらりやうかこちや濃茶の中じやもの

○朝歸りまのわるさ我金遣ふて氣苦勞してモウくコリくした二度とは行んどレくれ茶屋へ歸りましやうぞうすいたかして腹なをし昨夜の口舌を思ひだしぞうしやうしらんイツツぞやけて又いこかイエく夫れではれうちへ悪るいとれたいこのいけんでレモそうかいな

○うす墨にかきれるふばこにそへし山吹の花にたはむれ戀すてふうきなたてじとしのびしのんでかうなるからはなにはからう深山の奥のわびすまひ賤がふせやも月がさすわしが思ひは君をまつ鳥影にうれしなみだのかわくまもなくせふでもけふはゆかんすかどきぬくこのこるくせつつのみのもど

○大きな物で小さく見ゆるのは空に輝く太陽に月と星地球玉萬國地圖や日本繪圖まき繪

に書た不二の山寫眞の名所に人姿狸のきん玉廣間の壘をのへの松にをさの舟島のかげ
 二十八俵の土俵の丸其又角力のてれつくに御膳上等別社さんの尻ツペた
 ○福祿壽梯子ぞり、雷太鼓を釣瓶とる、ね若衆は鷹を持つ、ぬり笠ね山は藤の花、座頭
 のふんせしに犬つけば仰天し、腹立て杖をば振上る、荒氣の鬼も發起して鐘撞木、瓢箪
 鯉を押へましよ、奴の尻ふり行列、釣鐘辨慶矢の根來
 ○うたゝ寝の肌と肌しけよつ過ぎて鐘の音にフット目を醒し手枕の腕のしびれを伸しつゝ
 行燈引寄せ主さんの御顔つくく、打眺め斯なごのと添ふならば源兵衛例へ野の末山の
 奥寝て居て星を拜むとも夫に厭ひは無哩な」起きさんせ揺れど起せど目も醒めず小判紙
 引割さこよりで目鼻をつゝさもの

流行歌

○縁かいな節

○フット身に染戀風に寺を開きし清玄の心も散ぬ櫻姫残る思の念かいな

○颯と吹込隙間風余り寒さに引寄てぢつと抱きしめ目に涙これも夜着ないゑんかいな

○離れざしきにしむかい夏の空とて雷の音にアレと寄る膝は雨か取もつゑんかいな

四季の家みどり

○春は上野の櫻とき酒の機嫌に氣も浮きて鳥渡できたる妹とせは花がどりもつ縁かいな

○夏の涼みの兩國や音じめも粹な水調子楽しき今宵のむつごとはふねがどりもつゑんか
 いな

○秋は月見の柳し粹たどうしが橋本にさしこむかげもほのくらくも間がどりもつゑ
 んかいな

○冬は隅田の銀世界つもる思ひも今こゝに解けて嬉しい雪の肌こたつが取もつ縁かいな

○粹よふ粹よふ節

○アリヤサすいよふすいよふ「すいよふ日曜指をりかぞへチヨイトさのよいとさのよい
 やさ「わすれなざるなこれこちのひとチヨイトわりやさこりやさのよいやさ、すらよふ
 すらよふ

○若狭節

○心うき立つ春野の景色ウツクシイシヤナイカ仇な笑顔のコレサ桃櫻

岡祝亭和郎

○情死するとは夫や淺はかなアホラシイチヤナイカ死で夫婦にコレサ成ればせぬ

於々亭うれし

○丹後節

○いやとくびふる張子の虎もがてんさしたる風もある丹後の宮津でびんどだした

○わしどね前は七子の糸よ一子されたらむことなるエーコ〜丹後の縮緬加賀の絹仙臺
平には南部島陸奥の米澤江戸小倉メイシヨ〜

○米山じんく

○傘を手に持どなたもサラハ長のね世話にエサ、なりました

○追分節

○面影寫して目に持つ涙瘦たは鏡の故しやないスイ〜

○韓信が股を潜るもアリヤ堪忍よ踏れた草にも花か咲くスイ〜

○チヤカボカ節

○扇をやる身に朝顔はこがれ〜て目なし鳥コラやつとねへ……大井川へチヤカボカ

○太田が春の雨やどり籠のむしんに山吹はコラやつとねへ……道鐘が和歌〜

○ドンガラ節

○鐘も聞へぬこの山中にドンガラガン主と二人で寐て見たいそうじやそらじやそこつき

やドンガラガン

○立山節

○をまい。ゆゑエーならアノミわしやどこチーまでもエたとへ野の末エ、虎ふすのべ

も賤が伏家一でま〜もたいたりイー縫針手わーアーギア

○にくい。男どーうらんでいれエーど。一ト人寐る夜のチ、寒さチーしのぎ茶椀酒エ
ーから。ツイ逢どなる……をなごのねんー

○古茶江節

○ねまへを待ちくく夕暮に格子前十時の時計の鳴るまでもコナヤ十時の時計のなるまで
もつらいこと待遠な

○活惚節

○隅田川原に小鳥がみゆるコ、ハ鴈も都鳥

○別れ惜しさに見返り柳アレハ大門衣紋坂

○木曾節

○木曾エーナー木曾の御嶽さんはナンチャラホイ夏でも寒むいヨイヨイヨイ裕やりたい

ナンチャラホイ足袋をとへてヨイくく

○伊豫節

○こがれくくて寐りもつかす主は今ごろどうしてか硯ひきよせなんどかいたら戀しく
の此胸が文のもん句で届くやら筆なげすて、ア、しんき曉の鐘どんと身にしむ封じこん
だるうわがきに様まーいーるウ

○氣遣節

○ながい旅すりやきせるなんどはいらぬヨウイヤやういよサさせるめんどくさいとこし
にさすへよういやよういやさるんやらやれこのせはもせえんやらよ

○長門節

○馬關對帆樓より四方の景色を眺望すれば馬關の繁昌は有がたい馬關繁昌はよけれど
藝者の跋扈を見る時は切齒扼腕慷慨する藝者征伐堂々と一時にかりとる夢を見た露露一
聲夢さめて前嶺後嶺雲漢々愉快く

○鴻の臺から四方の景色を眺めて見れば悲風慘慄雲漢々哨兵散兵すんだのち品川乗り出
す吾妻艦うらみ重なるチャンくばうす西郷が死だも彼が爲大久保ころすも彼が爲日本
男子の村田銃筒の先へと剣つけてなんなく支那人討たをし一里半行きやハキン城愉快々
々たをれて止まぬ

○名古屋甚句

○今度このたび演習についてチー數多武官のある中で妾しの好たは只一人色か黒くて脊
が高て目元がぱつちり鼻高で口元じんじよで齒が白てヤツくどくゆらす巻煙草一掃勳

章胸にあて金剛時計に金くさり鳴り皮入りの長靴で栗毛の馬にどうちのつてサーベル抜
ての號令サ確シヤツプは白の筋夫丈こまぐ見たけれどかんじん要のれ名前を聞かぬ斗
りが苦になつて尾張の國へと赴むいて名古屋の城を枕とし打死にするよな心地してまい
ちと逢はなさやノーチホ、こがれ死にチー

○ヒヤ〜節

○雨や霰と鉄炮の玉が飛び來るけれど敵を打取りましようかノウコレ大將さん大隊中隊
小隊聯隊皆進め分取高名又しようどて打出したかヒヤ〜

○トンヤレ節

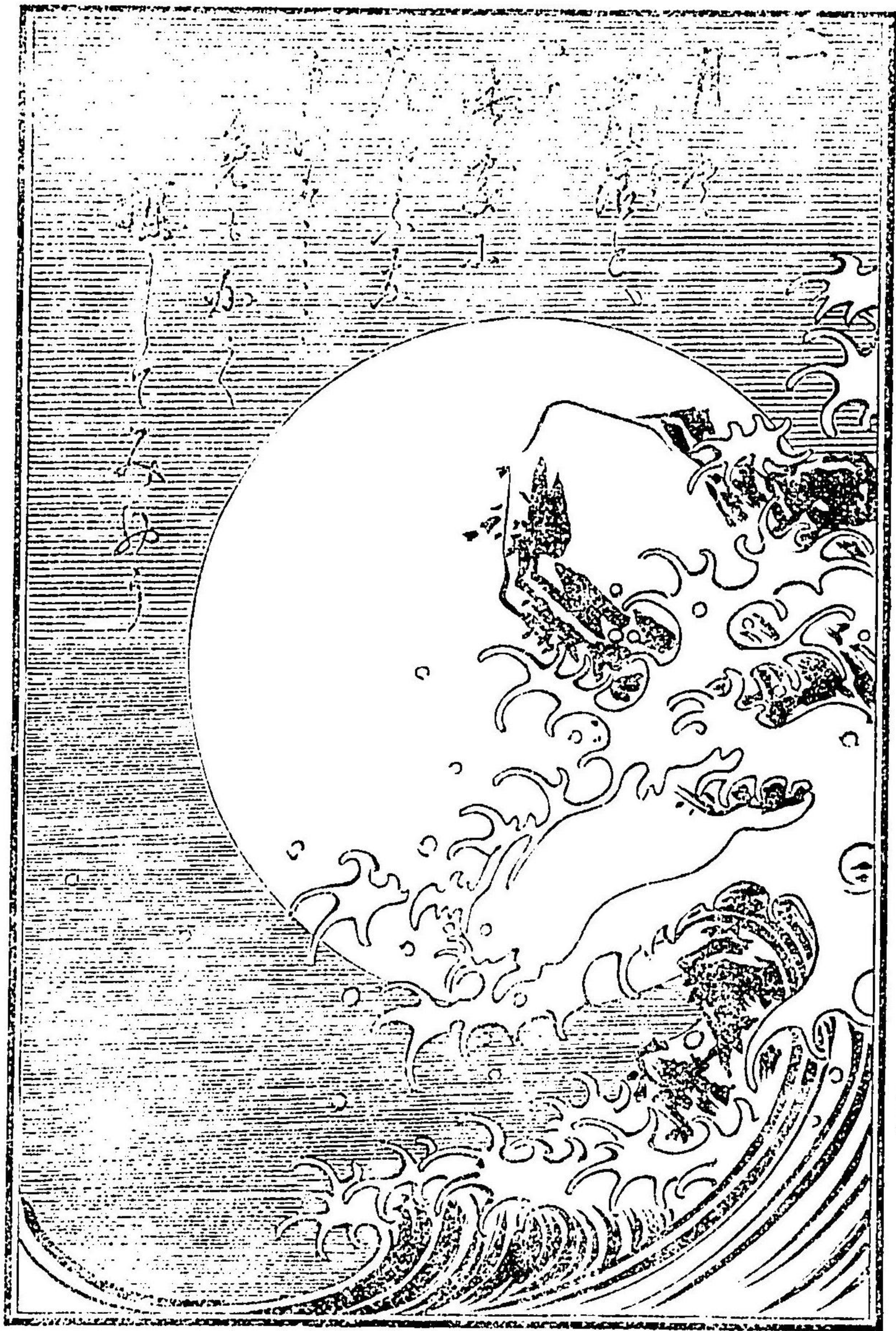
○宮さん〜れ馬の前にヒカ〜するのほ、なんじやいな、アレーは朝敵征伐せよどの
錦の御旗を知らないかトコトンヤレ、トンヤレトントンヤレナ

○オベケペー節

川上 音次 郎新作

○權利幸福さらいな人に自由湯をば飲せたいオツペケペー、オツペケペーポポーポポー
ー「堅い上下角とれてマンマル、ツホンに人力車いきな束髪ボンチット貴女に紳士の出

立で外部の飾はよいけれど政治の思想が欠乏だ天地の眞理が解らない心に自由の種を蒔
けオツペケペー、オツペケペーポポーポポー「洋語を習ふて開化ぶりパン食ばかりが改
良でねへ、自由權利を擴張し國威をはるのが急務だよ、智識と智識の競べやぬキヨロキ
口致しぢや居られない窮理と發明の魁で異國に劣すやつつける神國名義だ日本ポー
○不景氣極る今日に細民困窮 願す眞深にかぶつた高帽子金の指輪に金時計、權門貴顯
に膝をまげ藝者たいこに金をまさ内には米を倉につみ同胞兄弟見ざるしかいくらじひな
き慾心も余り非道な薄情な、但し冥道のれ土産か地獄でゑんまに面會しわいる遣ふて極
樂へゆけるかへ行ならよオツペケペーオツペケペーポポー「亭主の職業しらな
いがねつむは當世の束髪で言葉は開化の漢語で晦日の云譯洋犬だいて不似合たれよしな
さい何にも知らずに知つて顔むやみに西洋を鼻にかけ日本酒などは呑れないビールに
プランデーベツモット腹にも慣れない洋食をやたらに食ふのも負惜み、ないしよでかう
かで〜ドついてまじめな顔してコーヒのむれかしいねエラペケペーポポーポポー
○ま〜になるなら自由の水でくのに穢れをねとしたいオツペケペーオツペケペーポポー





三

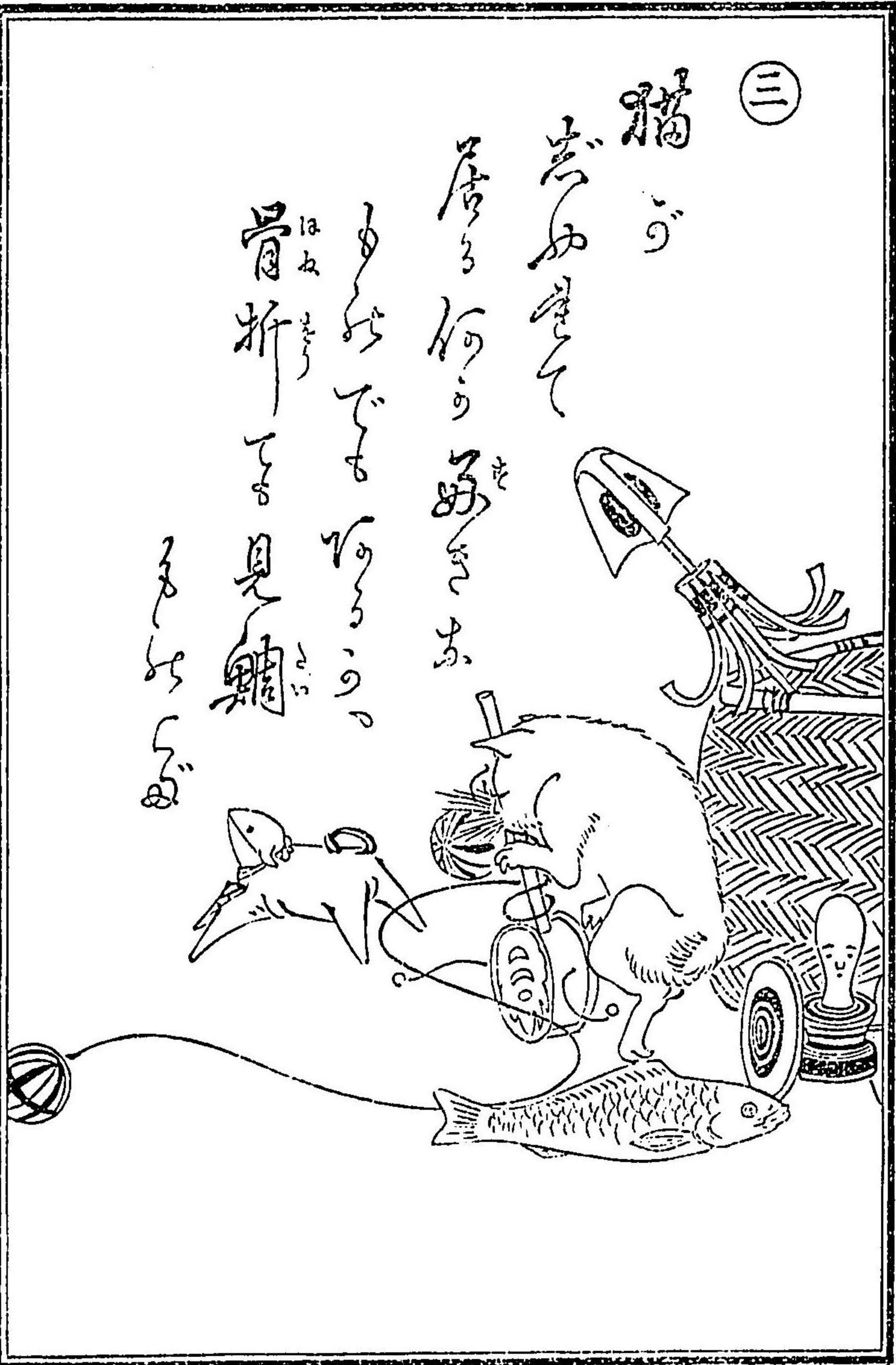
猫

志如堂

唐の何の好むか

骨折る見物

まよひ



四

ア、い、

景一色

とんち地

多幸

唐

阿茶

仕



○畫さがし解

①兔

②三平兩滿

③鯛の骨

④鶴

狂詩

○西塾霸王

醉多道士

戰爭雖破亦風流。埃下相吞別品謳。高祖岡燒圍不撤。飽究浴內一往先留。

○彼得大帝

智信仁勇嚴也。剛化扮書生。萬里航。月落鴉啼兵兒帶。延爲魯國目今長。

○和聖束

天賦人權存不亡。一朝妨害胸屎狂。前々思儀何更構。綠切拳吞與故王。

○情史絕句

○浦里時次郎

其一

夜來降雪壓真松。浦里無念涕沾胸。生死任他超此塚。一飛夢覺明方鐘。

○夕霧伊左衛門

其二

長々病氣一間中。針與接摩保此躬。伊左量見自有略身請。當日示貧交。

○鈴木主水

其三

日々每晚新宿通。女房分別不身躬。一刀貞死阿安血。主水今更面目紅。

○梅川忠兵衛

其四

浪華逃遊。寧身廿日。散財四十量。只二分金。逢旨有細々。迎着吾親鄉。

○阿染久松

其五

鬼門家向水油塵。名代阿染振袖媚。一宵仇夢相互汗流爲情死浮名淵。

狂歌

○無題

○鹿は笛狸は太鼓うつ夜半に調べこと〔琴〕なる松風の音

玉

緒

○戒心色

○恐ろしきものとしりなば避ぬべし夜半の襖の鳴神紙鳴の音

不知讀人

○大門口

○後朝に心残せば見返りの柳も袖を引くかどぞ思ふ

衆妓員妓籠

○女郎買の果

○女郎に實つくした功かいつしかにめぐりくるまを今はひくなり

山守舎久鳥

○述懐 (言文一致)

台山邊人

○めかしても女は惚ず稼いでもね金は取すア、困るナア

○婚姻した人にくる (同)

同

○ね目出度御坐い升たヨ實に早ね日柄もよく滞り無く

○女郎買

光姿なんし

○くるくと煙管ばかりを廻し部屋煙のごとくにひたし敵娼

○

長崎臨笑

○屋根船を出る游女や真似にけん柳も人のかたにかゝりつ

○太鼓持

秋園

○客人の口に合せて太鼓持ならずつゝみもうその皮張

○狂歌上の句附

題 ちらりチラ〜〜

○硝子障子往來とたへす移るなり

樹

○また初め博物館の縦覧は

暗合

新ゆ

窓り亭

- 最負相撲勝度毎に土俵へ花
- 見飽ぬに惜しや櫻も今は早
- 海原へ夕日の透ける漣みは
- 四五日は庭の櫻も時めきて
- 花見んどのいふ花の裾廻り
- 菜の花のさくや彼岸の人通り
- 余所を吹風もしはしは花に来て
- 祭日の國旗は風にひるかへり
- 若狐化かす手術の管は

○ 狂歌下の句附

苦しき中に樂しみぞある

- ソンテーの一週間は待遠く
- 我一と押す大入の鼠木戸

貴 瓢 林 如 柳 英 雨 變 山 樹 の
 玉 氣 花 文 月 仙 谷 齋 月 亭 助
 化

- 初産の左り孕みは男子よと
- 姑の介抱つくす嫁の胸
- 親兄の爲どねもへは川竹の
- 貧しさの中に育つる子寶は
- 差金に過たる延米の數仕かけ
- 營業の透間くにする投書
- 夜を晝ると學ぶ書生の勉強は
- 商法を勵けむ内輪のやりくりは
- 山行や重い行厨の荷擔きは

瓢 岡 立 孤 林 同 仰 英 地
 氣 田 亭 鹿 花 花 仙 藏
 花

狂 句

- 焚付る奴が有るのであつくなり
- 急がずは瀧車でもよいと虎の言

根 岸 白 蓮 子
 奈 半 利 馳 猫

○わたゝかな風に吹かれて家も灰
 ○むべ山の嵐燈を消すうたかるに
 ○ほそくない儲けと洒落る生糸商
 ○献も手延ばせば細でたばねらる
 ○鹽谷とは土地さうれうの苗字也
 ○首筋で三保の谷末世名をのこし
 ○ねも煉りの四子が兎角口にあひ
 ○錦手の茶わん古郷へよいみやげ
 ○猿若座尻よりわかいかせにあひ
 ○爪に凝る小供こゝとも上ワの空
 ○都の自慢ひがしは火にしはみづ
 ○堂で瓦斯なぞと銀座の鬼すゝめ
 ○小賣屋は烟も立たぬたばこみせ

横濱鶴の家
 兵庫佐運清貴
 千葉一二散史
 福岡尺八
 京都大宮人
 中越玄々子
 信州野口二三
 松の家梅河
 春夏亭秋冬
 前橋田原
 吞水連萬八
 出沒菴主人
 咄珍社○○

○氣が浮くと家くらまでも揺ぎ出
 ○佛々ど小言をいふはよ支那さい
 ○さくら炭野風呂を扇ぐ風にちり
 ○米を炊ぐ身振り下手書の内
 ○戀風の吹くころ土手の艸は生へ
 ○耻をかくとは塗りいたの所刑文
 ○醒さかせ吹くへびの出入るあな
 ○三足の五徳火ゑんにりやうの爪
 ○口に糊せねば體もぐにやとなり
 ○縮緬のふくさで饅頭つゝむなり
 ○分り升と云ふて分らぬ庭の下駄
 ○咲くはなも高みに見える鞍馬山
 ○子供に反り突く杖でトットの目

玉島蝶句堂
 出沒菴天運
 京都大宮人
 竹葉舍昌安
 曉鶴舍若蘭
 長崎臨笑
 同樂社國香
 茨城ふでき
 一杯菴半醉
 榮樹庵○□
 同樂社紅於園
 福岡頓癡
 茨垣ふでき

- 惚薬盛るには醫者も金の匙
- 馬鹿難し太鼓のねとも鈍となり
- 戀の重荷は細い腰ほどよく擔ひ
- 香水連痴鳥
- 春夏亭秋冬
- 香水連萬八

虫ほし

○蚩尾と試風の鳥形との夕涼

式亭三馬 戯編

鬼かわち○ア、暑いぞくけふは暑い日てわつた屋上石灰は落る針銅はゆがむ天窓の青苔ばかりが頼みだけれど此炎天に蒸れては是も枯れるだろふ底間の地瓦はよつほど安瓦を遣たと見えてへんく草や性根草が小澤山に生たが猫の穢物の乾かたまりと一緒に入んくど鼻へ這入るとんだ所で草いさを跟ぐ物だせまたねつりきな匂がするやうだフンくトかぎハ、ア齋めがいつの間にか鰻の骨をさらつて来て棟瓦の箱へ隠したナチヨツうるせへやつだれれが小鬚へ糞をしかけて白チく痕をつけたツけが昨日の白雨でやうく落ると又猫めが二番目をねめにかけて是にもねられるトいひなから隣の火の見やぐらにぐるくまはつてゐる風見のからすにむかいどうだ勘公けふも暑かつたせ風見△暑いのゆのかたつきし目が廻るやうだねめへも嘸焼切たろふ鬼瓦○ちよつとした雨じやちゆうと吸込のよ併一降ほしいの風見△ざつと行水をしてへ一年中ウくるくど廻つてばかりゐるも氣がきかねへせ風が風てちつと休まうと思ふと下から調市か上つて来てむやみに廻しやアがる別ちやアねへ風車の名代新造よ今度来た小二めに目紛しい程いたつらだせ火の見の笠木へ登つてれれが天窓へつかまつて居たツけが髭と尾を折たチヨツ生れもつかぬ支離に爲やアかつたせいめへましい全体ねらが体は爰の内の居候の細工で出来たのだから最う修覆の爲人もなし今ぢやア居候は居ず療治の頼所がねへ鬼かわち○とんだ災難かあるもんだのしかし何所の小二も悪いたづらをするよ今でこそ番頭なれれらが店の丈八殿も寐小便をたれた時分はすてきないたづら者よ棟瓦の上を走渡つてはれれが天窓へしかみつくのさ光明丹でれれが面を彩たりね坊さんの額へつけた金箔の余りを持って来てれれが眼を泥箔にしたる能慰み物に爲たツけが速いものだいつの間にか番頭さまに爲て大きな面をしてゐるその面の大きさは負ねへがれれはいつまでも蚩尾だしかし人

を下目に見て大きな面で睨付た所はどうか好様だの 風見△れれも高く泊ッては居るが當世にはむかねへ兎角腰を低くして下から這ねへちやア當時納らねへよダガれめへたちの年來ちやアそりや出来めへ 鬼瓦○どうして出来るもんか業忍瑛伽の 過事が斯だに仍てト生れてから丁と百年目だ夫を免れたかられれも最う老年よ今時の新瓦などがりきんても老たれれにはかなはねへ 風見△其筈さむかしものは生質が丈夫向だものを錢が七貫こまれば小判二兩になつた時と今一兩になる時とは瓦によらずすべての物が違ふ筈さ 鬼瓦○れらが若い時は門並に鬼瓦を置たもんだッけが今じやア鬼瓦の名ばかりで鬼はつけねへそれだから今の人氣にも合すれれも漸々に老筆ばかりナニサ體さへ丈夫なら若い新瓦などに負る事ぢやアねへ此町内の屋上中で万八の土藏と伊勢小次の店藏とれればかりが古いものよ箱棟とか云て立派に見せかけるのと抹額通りを幾段にもして工手間をかけるのは近來の新物でれらが若い時分に絶てねへことだコレ見なせへ爰の屋上も軒口三尺は地瓦の新で置替たが雨をしみ〜と染込其所へ往ちやア憚なから老筆てもむかしの地瓦だ雨をぐッ〜とはちいてさアつとぶん流して見せる今の新瓦のやうに甲業の寛事ぢや

アねへ火に弱い下り瓦に天上見る様な地瓦じやア江戸瓦の面積しといふのだ棟も平も指替に爲たが爰で昔瓦の根性骨を見せる所さ何様に踏あるいてもミシリといふのぢやアござらねへ本の事たが〜つらもねへしかし地震は身の毒だア、否〜此年て落るが最期夫限か但しは中氣た 風見随分用心するがい、ためへ又美女を見て衆の仙人は眞平だせ鬼○女湯の番頭で若い時から悟つたものよ 風見△れいらア浮虚の風吹鳥でふら〜と氣さんじ〜時〜の風に順居りやアいさもくさもねへといふやつドリヤこれから往來の美女を見て樂まうか眞晝間は日傘でかくれるが最ごろ〜蔭ッて來たト下を見てそりや來たぞ〜指物かよつはどふめるはエぞつと五六十兩の天窓だあの天窓を潰すぢやいとした土藏が出来るにあの亭主も不經濟家だぞ〜ね三どのも同じく指たア馬爪は止ばい、指ぬに劣だのに不便などだ鬼○世の中を後から見るとよつほど面白といふけれど上から眞下もまんざらでねへドリヤ夕涼と出かけようかハアそろ〜夕風が出て來たア、い、風だ風見のからすぐるりと廻つてかぶりをふりながらサア〜〜れれはこれからが闊しいアレ〜〜又吹て來たトぐるりとまわる鬼○アレ彼所へかけて往く

人は錢を四百落したせ 風見△ドレ／＼とぐるりと風にふりかつつて好眼だのよくあれが
見ゆるせアア折助すぐに拾ひ鬼○ハテ運の好折公だハツはつくしよハツはつくしよホイ
く風でも引たかやたらに噴鼻が出る 風△噴鼻の出る傍にれれば故障だの鬼○虚はねへ
ハツハツア、出そうで出ねへハア引はつくしよフム道理こそ鼻孔へ蝙蝠が飛込んだ

新撰いろは比喩

い 一片の雲も大陽を隠すに足る
は 蓄微の美なるも刺なきを得ず
は 星は日光の爲に見へず
と 時のある時に時を得よ
り 量過るときは袋を裂く
る 琉璃堂も破るれば茅屋に劣る
わ 涉らずして淺瀬を侮るな

ろ 論に負て實に勝て
に 肉もて打る、犬は吠ることなし
へ 勉強と節儉は幸福の手足
ち 珍談も再び語れば味ひなし
ぬ 糠を以て老雀は捕へかたし
を 温順は愛敬の母
か 風に向て塵を拂ふな

よ 能く吠る犬は必ず噛ず
れ 料理人多くして羹汁の味を損ず
つ 常に轉々石は苔を生せず
な 傲すことなき者は不善を爲す
む 無情の水も蒸せば能く鼎を擧ぐ
る 威儀は愚拙の蓋
れ 落す駿馬より乗する驢馬に乗れ
や 和らかなる言語に口を傷めず
け 今日の後に今日なし
こ 古枝は折れ易く新枝は矯め易し
て 鉄は赤く熱するを見て打て
さ 災害は帝王にも禍はず
ゆ 愉快の時間は経こと速し

た 樽を見て酒の善悪をいふ勿れ
そ 袖長くとも手は伸されず
ね 祝ひを定めずして矢を放つな
ら 蠟燭は其身を耗して外を照す
う 打れて笑ふ者は再び打れず
の 能辨は決して智者の證ならず
く 快樂の夕には憂苦の旦あり
ま 貧しからんより寧ろ其身を售れ
ふ 負債の返却は危険の消却
わ 艶妻を持つものは兩眼の外に眼を要す
き 油乾けば燈火滅す
め 希望することは欺れ易し
め 眼に外物は見れども眼に眼は見へず

み 蜜を甜るには小指を以てせよ
 ろ 香餌の内には針あり
 も 物比較されは善悪なし
 す 直なる杖も水中に曲て見ゆ

○新案いろは歌

い 今は昔と異なりて
 は 聡ちも愚れも學問を
 は 程に報ひの影なるぞ
 と 逆も身の浮く瀬はわらじ
 り 利害の程を明らめよ
 る 類を離れて學ばずば
 わ 我身からなる錆を衣て
 よ 世に捨てられし人々の

し 思案は人に言れぬ事多し
 ひ 燧石も打されば火光を發せず
 せ 小孔水を洩して大船を沈む

一山居士

ろ 祿も位も智慧次第
 に 日夜に勵み怠るの
 へ 平生遊ひ暮しなば
 ち 千々に思ひを廻らして
 ぬ 擢んでられぬ其中に
 を 老て悔ふとも詮あらじ
 か 唐に和に古くより
 た 例しは數多あるぞかし

れ 練磨を忘るゝとなかれ
 つ 培かふとの無かりせば
 な 名は末代の身の紀念み
 む 胸に置く手の裏表
 ゐ 井に住む蛙は白糸の
 れ 多くは變り進行く
 や 闇みも月夜の電氣燈
 け 蓋し古人の見聞させば
 こ 此開らけ行く世を知らで
 て 手を袖にして只管らに
 さ 澤なるところ悲しけれ
 ゆ 行末愛ふる輩らへ
 み 見もし言ひもし學びもし

そ 園の梢も花も實も
 ね 根葉諸共に枯れぬらん
 ら 樂も苦も皆な其元は
 う 有爲轉變の世の様を
 の 望みも細き瀬も瀬と
 く 陸に蒸氣軍海に船
 ま 待つ間程なき電信機
 ふ 不思議と言ふの外わらじ
 ぬ 益なきとにのみ泥すみ
 わ 遊び暮らせる人々の
 き 來れよ來れ同胞らの
 め 盲も啞も今は皆な
 し 加之ならず稚兒の

多 エビシデさへも習ふ世ぞ
も 揉めよ揉まれよ内外どの
す 進めよ人々覺よ皆な

ひ 卑屈の眠り疾く覺まし
せ 世故人情に文に武に

詐欺奇談

○新任の警部

封建の餘習漸く脱却して上を恐れ下を壓すなるの悪弊社會に跡を絶ちしは悦びても尙ほ餘りあることなり然し數百年來の遺傳力暗々裡に其風を存するはまた是非もなき次第と謂ふべし今を距る七八年前或縣の本廳より程遠からぬ市街に警察分署あり其長は警部補にして詰合の巡查は十八許なり一日非番の巡查は宿所に下り常番の巡查二人は巡回に出で残る五人と警部補とは「テーブル」を中央に圍居して世間斷しをなす折柄配達し來る新聞を抜き見れば雜報の初欄に昨日警部の拜命ありし事を記載し月俸五十圓なれば上等の判任なり鬚尾伸一と云ふ名さへ知る人ならねば何れの手引にて何れより轉任せられし

や知る者なし兎角縁邊なくては出世覺束なしと我身の上を憶い歎息するもありしが夫々己が勤めに従ひけり斯くて其日の午後二時頃人品賤しからず洋服を着し一個の男分署に入來り詰合の巡查に向ひ

警部 我輩は昨日當縣の警部を拜命した……鬚尾伸一と云ふ者です……以後御心安く願ひます……署長さんは御在宿ですか

どの事に借は新聞にて見し警部は此人ぞと巡查一々名前を告げ何分宜しく御引立を頼むの禮儀をする間に署長警部補も之を聞きて出迎い一應の禮儀濟み其詰所に誘い入れて今や談話の緒ちを開かんとする折もれり車夫よふの男が分署へ駈來り息遣い劇しく

車夫 た……た……只今此さ……先で兵隊さん……二十人許りと巡查さんが……喧嘩をして居られます……巡查さんは歐打れて……血染衣ですから鳥渡御知せ申します

巡查打愕と早速署長に告ぐれば署長も當惑の体に偶々來合せし警部氣を勵まし

警部 ナニ兵隊と喧嘩……ナル程今日は水曜日ですから澤山遊歩に出て居るだらう……トモアレ救援に……然し大勢では困るから皆さん御出懸けなさい……我輩が署に居て

わけます

署長 左様ですか……ソナナラ暫時御願ひ申します

巡查を引連れて飛出した署長は車夫の告來し方へ馳せ兵隊の喧嘩は何處ぞと心を配りつゝ行くこと一里許りなるも更に其模様なければ往來人に尋ね問へども知る者絶てなし不審に堪へねば分署も氣遣はし急ぎ引返し見るに留守を頼みし警部殿は居らず愈よ不審なりと署内を檢査るに用筆筒の錠前を毀して備付金若干と共に警部の姿消失せたり偕は警部の新拜命ありしを種に二個の悪奸が巧みたる事なりしナエ残念やと齒切すれども追付ず跡にて考へれば道理こそ共名に似ぬ鬚のない洋服を着たッデない人物であつたわい

○宴會の使者

實に光陰は矢の如く廿四年の曆も今は早や紙屑籠に投げ入れられて誰一人不憚と思ふ者なく己が身の歲月も重ねて間もなく此曆に均しく土穴に抛げ込れることさへ心付ず來る新玉の春をのみ祝いぬる人の果なさよと聖人を氣取つた所が拾九世紀の烈しき世界には矢張り通用にならず物事當世風に倣ふのが世と能く推し移る真正の聖人なりと町内

の改進黨輿論に勝を制し忘年宴會は柳橋の月に夜を更し日本酒の二日酔に書出しのべを六七本間違へて此責を頂戴したが廿四年の初春も最早今日は七日になれば新年宴會なるへからず這回は二日酔は三日酔でも書出しの心配なし少しも吉原へ近い所りに集會したいと遂に議案を可決したは本日正午十二時淺草放遊館に新年宴會を開くの一事にして相會する者都合三十六人なり時正に十二時を三十分過る比宴會の準備全く調ひ各々定め席に就き祝辭の朗讀は賣上げ高をゆる時の讀音に似て句調面白く席上演説は喝采拍手の爲めに壓せられてエーの聲のみ聞へたり頓て酒杯の運動始まり紅裙五六人興を助け三味太鼓に煽動られて謠ふもあり舞ふもあり四時頃には何れも強く酔ふて平常に似ぬ事を口走しり梅花未だ開らかざれども吉原の物云ふ花も亦た臘月夜に一興あり是れより一同押出さんと年上の太郎兵衛が「ランプ」頭を振り立ての動議なれば誰あつて否むものなく賛成く大ヒヤと總起立の足元危うく直にも押出さんん狀況なりけり話頭轉換助内の家々では妻君の事務平常より閑はしく小兒の世話は勿論奉公人の指圖より壺所の囃事までも残る暇なく行届かせ其上に少し暇があつて煙草を一二服吸ふ中に亭主の事を思い出

し先刻四時を打つたからモウ歸りそうな者夫れども又た皆んなに誘はれて遊びに行つたのか知れんが之を思へば婦女程割の悪い者はない一月二つなつても髪も碌に結はず親里へ年始に行かぬのが三年目になるぞふか來世は男に生れて見たいと餘計な事まで苦勞にするは婦人の持前何れも同じ様な氣のない顔色をして居る一軒の宅へ餘程急いで見たと見へる車夫体の男

車 御免さい太郎兵衛さんとは御宅ですか……私 は淺草の放遊館から頼まれて來ました
 が旦那は是から御交際で……何處かへ御出になれば少し遅くなるかも知れぬが案じる
 など云ふて呉れどの事でした……附いては寒いと困るから能い方の半纏を取て來て貰
 たいどの事でした……急ぎですから御早く願ひ升

妻 チャッウ……亦能い年をして吉原へ行くのか……ナントカ斷つて歸れば宜いに……禿
 頭をして能い方の半纏も聞いて
 と言掛けしが使いの前で亭主を譏つた所が別に役にも立ぬ事と心付き起つて簞笥の引出
 より半纏を取出す中にも亭主を思い人中へ穢い衣服を着て出すのは女房の耻辱に嫉妬と

思はれては思々しいと流石江戸つ子の妻君丈けあり一番上等を持ち出し
 大きに御苦勞さま……此れを持て行つてくれ……ソシテ御隣りの吉太郎さんはへ……

車 ……彼人もかへ夫れはツイ東し隣りさ
 車 ハアソウデスカ……大きに御邪魔さまを左様なら

太郎兵衛方を立去り男は東し隣りの吉太郎方に到り
 車 御免なさい私は淺草の放遊館から來ましたが……旦那方は今夜御歸りが遅くなるに付
 き……寒いと困るから衣服を一枚持つて來て呉れどの事で今御隣りでも請取つて參り
 ました直に御渡しを願ひます……未だ餘程廻らねば成りませんから

母 ソレハく御苦勞さままでございやす……ソシテ此れを御遣りなさつて下さいませ……
 ……ドウカ母が案じるから早く歸れと御陳て下さいませ……ソウシテ向いの八五郎さん
 はへ

車 ……へイ八五郎さんの所へも行くのですが向いですか……へエ左様なら大きに御邪魔さまで
 した

と出行きし男は又々八五郎方へ行き夫れから夫れへと尋ねつゝ夜寒を洩ぐべき半纏綿入
 れの類を取集め淺草さして立去りぬ斯くて其夜の十二時過ぎ吉原に行つて酒の酔を奪れ
 て見れば朝歸りも極り悪るしと各々我家に立戻りし三十六人何れも使いに渡したる半纏
 綿入れを着て居らぬゆへ妻君または母親より如何せられたと尋ねれば何れも不審な顔色
 にて使いを遣した覺へなければ品請取らう様なし、さては一杯喰はされたかと訝かしく
 思ふ亭主あれば女郎に遣て来たかど嫉妬を起すもわりしが翌朝に至り何れも嘶しの合つ
 て居たので互いに疑念は解けたれども騙賊と知れては捨て置かれず放遊館へ照會して
 も元より知れる筈なく詮方盡きて其筋へ届け出たどの事なるが新年早々縁起が悪いと云
 ふもわれは未だ節分前だから厄落としと断念めるとして西の海へ「サラリ」と云ふ舊弊家われ
 ば否や夫れよりは己れが厄拂いの口上を仕やう斯様な奴は監獄署へ「サラリ」是れも江戸
 ツ子の氣性を捨ぬ洒落かも知らん

○浦島の妻君

本町通り上等の旅舎に止宿なさる御客さんが呉服御入用どの御使いなれば粗忽な取扱い

をしては店の暖簾に係る事と御召縮緬系織南部或は筑前博多の帯地等高價の品數十匹を
 撰り分けて風呂敷に包み此程鏡屋にては騙賊に遭ふたどの事直々御客に見せて商いに忽
 滑るでないど番頭の指圖を心得顔と風呂敷包を擔い出した小僧は間もなく旅舎に到り下
 女の案内に連れられて奥の客座敷に通れば人品賤しからぬ年齢三十許りの婦人床柱に凭
 れ火鉢を左方に置き二枚重ねし敷布団の上へ斜めに座し少し離れて右方に支那革袋のわ
 るは此婦人の手荷物と知られたり小僧叮嚀に挨拶し持來し風呂敷包を解きて並ぶる反物
 を彼れ此れ見立る婦人は御召縮緬黄八丈一匹づゝ博多帯一筋其他目ぼしき品二三個撰り
 て己れの側に置き

婦人 是れ丈けで如何程になるね……鳥渡當つて御覽

小僧 へエ正札附で御座りますから「と十呂盤を手に取りパチくく」エーット六十壹

圓五十錢になりませ

婦人 ソチ……少しは引けるだらうね……ナニ「マカ」らんどへ……端錢（六十圓の端壹圓
 五十錢の事と知るべし）丈も引なされば宜いに……兎もわれ是れ丈け貰ふてれこふと座

を起つて支那革袋の側に行き錠を開け掛けしが俄に何か思い出した様子にて元の座に立戻り

婦人 御前の店に七子は無いかね……七子の上等が欲しいが

小僧 エ持つて参りませなんだ……御入用なら取つて来ませう

婦人 ソウサチ……取つて来て御呉れ……是れ丈け置いて他の品は持つて御歸へり……序

でに端錢だけ引けぬか聞いて御出で……一所に勘定を仕て上げるから

小僧 畏まり賣り残りの品を擔つて立歸り番頭に其由を告げ上等の七子二三匹を持ち再び旅舎に到り婦人の座敷に通り見れば婦人は居らず賣る約束の品がないので旅舎の店に行き御客さんは何れへ御越なされしと問ふに今方近所に見せる人があるとして出て行かれしが跡に大事の荷物(支那革袋を指す)もあれば今に御歸りなさるだらうと聞いて成程と思ひしものから待と二時間許りなれど歸り来ねば少しく不審を起し全体彼の婦人は何日頃よりの御逗留で何處の御方と尋ねれば先刻御着なされた許り何處の御方かは宿帳を見なさいと差出せし帳面には越後の國新潟港某町六十五番地平民島田ウラとあり越後の者が

近所へ見せに行くべき知己のある筈なし愈よ不審な譯と直様立歸り番頭に注進すれば番頭の驚き一方ならず云はぬ事か馬鹿者と叱責つた所が跡の祭り警察へ届出で警吏の派出を請ふて置去りし支那革袋を披らき見ればコハ如何に中は紙屑を捻ぢ込めるにぞ全く騙取の所業と知れたが責てもこの樂みにせし支那革袋の中さへ紙屑とは浦島の故事を思い出されて嘸かし開けて悔しき事なんめり

○意外の仁術

歐米の學術技藝陸續と輸入したる中に就いて最も我國人の習い熟せしは醫學の由にて之が爲めに天壽を全ふし得る者尠なからぬは悦ばしき限りにこそされば何れの縣にも學士號を肩にする名醫の住居するありて不時の急患者を診治せらるゝが東京に程遠からぬ縣へ去年より移り住宅はるゝ名醫あり此名醫は學街衆に超ゆるのみならず患者を取扱ふこと最と信切なれば遠近其徳を慕い治療を乞ふ患者日に其數を加へ門前常に市をなし自然と藥價の收入多く俄に有福の身となり豊かなる月日を送られけり此頃詰掛けし患者の治療を終へ調劑方さへ残りなく指揮して今は心安しと打罷ろぎ數杯傾けし晚酌の醉に促が

されて寢所に入り忽ち熟睡して數々華書に遊びし夢を打破るは表の方に當り雨戸を敲く音「トン／＼／＼」

使頼み申します……(トン／＼／＼)御頼み申します……(トン、トン)御頼み申します
……(トン／＼／＼)急患者ですから御頼み申します……根堅村の金田六左衛門より参りました

彼の音に書生や下女は未だ目を醒さぬか能く寝たものと名醫は自から寢所を起し出で玄関の方に到れば尙ほ戸を敲くを制め

醫「何か御用ですか……何處から御出なされた
使へ私共は根堅村の六左衛門さんから來ましたが……六左衛門さんが夕飯過ぎから俄

に吐き瀉しで……是非とも先生に診察して下さいと云付つて参りました
……夜分御氣の毒さまで何か何卒先生に御來診を願います

根堅村の六左衛門と聞いては忽かせにならぬ近郷の大富豪殊に病氣の時は御世話になるからと平常能く行届さし家なり去連夜中壹里餘もゐる在方へ赴くは氣のない噺し最早何

時だろうと思ふ途端に柱時計が(チーン)と鳴りしは正に午前一時なりチャモウ夫んな時になつたか愈よ氣のない噺し然し宅に居て行ぬも悪るし一己の分別に落ちねば秘書官(妻君と知るべし)を揺り起して相談すれば他家と違ふから御出なさるが宜かるうとの事に漸く行くの決心して車夫を起せば折悪しく遊びに行きしか居らず取敢す雨戸を明けて使の人を内に入れば何れも血氣盛んの男二人なり車挽の居らぬ由を聞いてどふかこふか二人で挽いて参りますから直に御願ひ申しますとの辭に勵まされて衣服を改ため時計其他診察の器械等取揃へ大きに御待たせ申したと腕車を出させ打乗れば壹人の男が梶棒取つて挽出すを壹人の男は跡を押し根堂を指してぞ急ぎける斯くて挽行くこと半里許りにして根堅村への本道を左りに折れ岐路へ挽入るれば名醫心付き途が違しなるかと詰り問ふに先生は御存ないが是れこそ根堅への捷路なり永年此土に住む我々何條途を間違へ申さんと尙ほ足を疾め挽行くこと半里許りにしてモウ此郎等にて好さそうなど歩を止め腕車の梶棒を地上に置きしは根堅村にわらず人里離れし森の中古祠堂の鳥居前なり名醫さては悪奸に計られしかど心中強く愕ろさしがさるにても何事も爲る者ならんと其所爲

を黙視れば二人の男は噤せしつゝ、各々懷中より短刀を取出し抜き放し名醫の側に近寄り今迄根堅村の百姓と見せし辞さへ俄に憎々しく

甲 己等は旅嫁ぎのトン／＼(強盗と知るべし)様だが……今夜御主の所へ御見舞い申すと大分大勢在宅の様だ……晝間聞いた名で俄に仕組んだ此狂言……六左工門がどんな顔面やら見た事も無い奴だから病んで居るか知りヤアせぬが……己等の懷中が吐き瀉して困るから是非とも薬が貰いたく此處迄釣出した上からは……人の来やう筈はなし直に癒る薬が欲しいナア兄弟……「乙 ソウヨ……チヒ醫者どん今聞なざる譯だからどふか薬を下さいやし……挽いた事も無い腕車ア一里餘も引張たら酒代だけに時計位へは出さない……ナリニ病家廻りに金員は持つまいが時計はマサカ「アルミ」カ天鉄羅でもわるまいし……着衣悉皆貰ヤア一本(百圓と知るべし)がものはあるだろう醫者どん事たア早へが宜い……然し否なら此方から御見舞い申す迄の事さ……兄弟ソウメナアと右左より劫かす不敵の作爲に名醫殊の外立服したれど此奴どうして呉うと思へども二人に壹人の腕力較では及び難く殊に兇器さへ所持する悪奸と諍い立して負傷せんも計ら

れず兎角悪奸に欺罔されしを不運と歸らめ諍はぬこそ上分別左なり／＼と打點頭き襟にせし金側の時計を外し紙入の中に有合せし紙幣三十圓許りを取り出し望みの通り進上すれば是れ二品にて勘辨ありたし然し萬一不足なら宿元へ御出なさいと辭正しく言放てば二人の男は笑顔を作り左様濃厚しう出られては衣服までとは申されぬと紙幣と時計を手疾く請取り跡をも見ずして逃去つたり名醫悪奸の後影を見遣り勇氣頼みに加はり腹の中に充満せし憤の聲を一度に發し

名醫 「畜生め待て／＼……」妻君 旦那／＼……どふかなさいましたか……「醫 ハア今のは夢であつたか……然し能くある手段だから夜半に呼に來ても油断はならぬよ……尤ども是れでは詐欺にならぬよふだ……」著者 ナリニ私たちが讀者を詐欺したのさ

○途中の放免

茲に説出す一話は西國筋に其類稀れなる繁華の土地に初代藤右工門が紙屑買より段々成り揚りの金満家あり屋号を日の出屋と呼び質兩替を手廣く營み藏幾棟か建列ね誰已一人羨まぬ者なかりしが古人の所謂盛んなるは衰ふるの始めにて藤助四十五の歳偶と風邪

の心持と臥床しを原因に終に還へらぬ旅立ちしたりし忠義の番頭直助深く慨げさ藤助の子息當年十八になりぬる湯太郎を傳り立て未亡人を勵まし月日の経過を知らぬ間に早くも湯太郎が二十五の春にぞなりにける湯太郎天性伶俐にして手習い算術は勿論挿花茶の湯碁將棋より三味月琴の遊藝に至る迄悉く覺へ得て何一個人に劣らぬ博識と讚稱へらる身なりしが近頃遊藝仲間の交際とて或る遊里に誘い入れられ唯だ一夜枕の塵を拂はせし娼妓白妙の手練手管に心を奪はれ晝夜白妙の許にのみ通い藝者幫間を多く集め一方ならぬ散財に警察にても不審を起され内々身元を探偵せらるゝどの事に母番頭は殊の外心配なし種々意見をすれば却つて打ち腹立猶更ら慕る放埒に母は歎き悲しむを番頭は見るに堪へ兼ね元より伶俐な若旦那日ならず御目醒めすれば御心配なされませすなと慰めつゝも店に昨日よりの帳合いをなし居る所へ入来るは羽織袴に靴を穿ちし二個の男

甲 拙者共は當警察の特務巡查だが……家主湯太郎は居るか
番へユ……家主は不在で御座りますか……何か御用で

乙 何處へ参つた遠方か但し亦……近所にかどふだ

番へユエ遠方では御座りませぬ……少し……

甲 フム……實は當市中に近來賈紙幣がチラホラ見へるが……當家湯太郎の錢遣ひと云ひ當家に御不審が掛り拙者共は取調べに派出したので……現在の紙幣を此處へ出すが宜い最と殿かに命せられ儲ては家主の放埒するより我方を警察へ報告けたる者ありと見へたり然し潔白の身向をか恐れあらん紙幣悉皆取出し検査を受けて疑いを晴させんと番頭は委細畏まり取敢へず店向に小出せし金員七百二十七圓を探偵の前に並ぶれば探偵二人して一應取調べ別に疑はしき廉なければ一先警察へ持参ると紙に包み懐中せしが何か打點頭さ再び取出し番頭に渡して封印させ氣の毒ながら警察へ同道せよとは金員を手渡すより心安しと番頭打悦び封金を風呂敷に包み此由未亡人小僧共に申合め探偵に伴はれて警察の方へ出行さけり斯くて警察より一丁許り手前に到りし頃探偵二人は私語きて一人は跡へ引返へせしを暫らく之にて待受けんと近傍の茶屋に立寄て待つこと半時餘りなるも歸り來ねば一人の探偵氣を苛ち鳥渡見て來ると立出しが是れ亦歸り來ず午前十時頃より午後三時まで待受けしも一向音沙汰なきは訝しきも金員を此方に所持すれば疑ふべき事

なく何が急ぎの用事出来て歸り來ぬ者ならん去りながら空しく此處に待受けるも詮なし
 兎に角警察へ行き伺い見んと番頭は警察に出で此由申立るに警吏更らに知らぬとの事に
 愈よ訝しコハ主人の遊びに耽るを知りし者徒らの仕業なるべし益なき事に時間費しぬと
 番頭は獨語さつゝ急ぎ主家に立歸れば未亡人小僧まで案じ煩らい如何なりしと尋ね問ふ
 を番頭はニコ／＼顔にて事の點末述べ終り時間は費せぬは何より以て悦ばしと懐
 中せし風呂敷包みを取解き探偵が包みたる金員の封を切り披き見ればコハンモイカニ何
 時の間にか新聞紙と摺替へあり者は一旦懐中せし時の手品と知れ番頭須臾開いた口の塞
 らぬ程愕さしが再び警察へ届出で家主蕩太郎に報知すれば早速立歸り右の始末を聞き仮
 令ひ探偵吏にせよ濫りに他人の財産を捜査する事のならぬのは最初より知れた事にと流
 石規則を辨へ居れども元／＼自身の放埒より起ることなれば番頭に叱責も云はれず却
 つて其非を悔ひ改めしとは遅かりし由良之助否蕩太郎どの

別天地終

明治廿四年九月九日印刷
 明治廿四年九月十日出版

正價拾錢

發行所 集文館

東京京橋區中橋和泉町四番地

發行兼印刷者

西村寅二郎

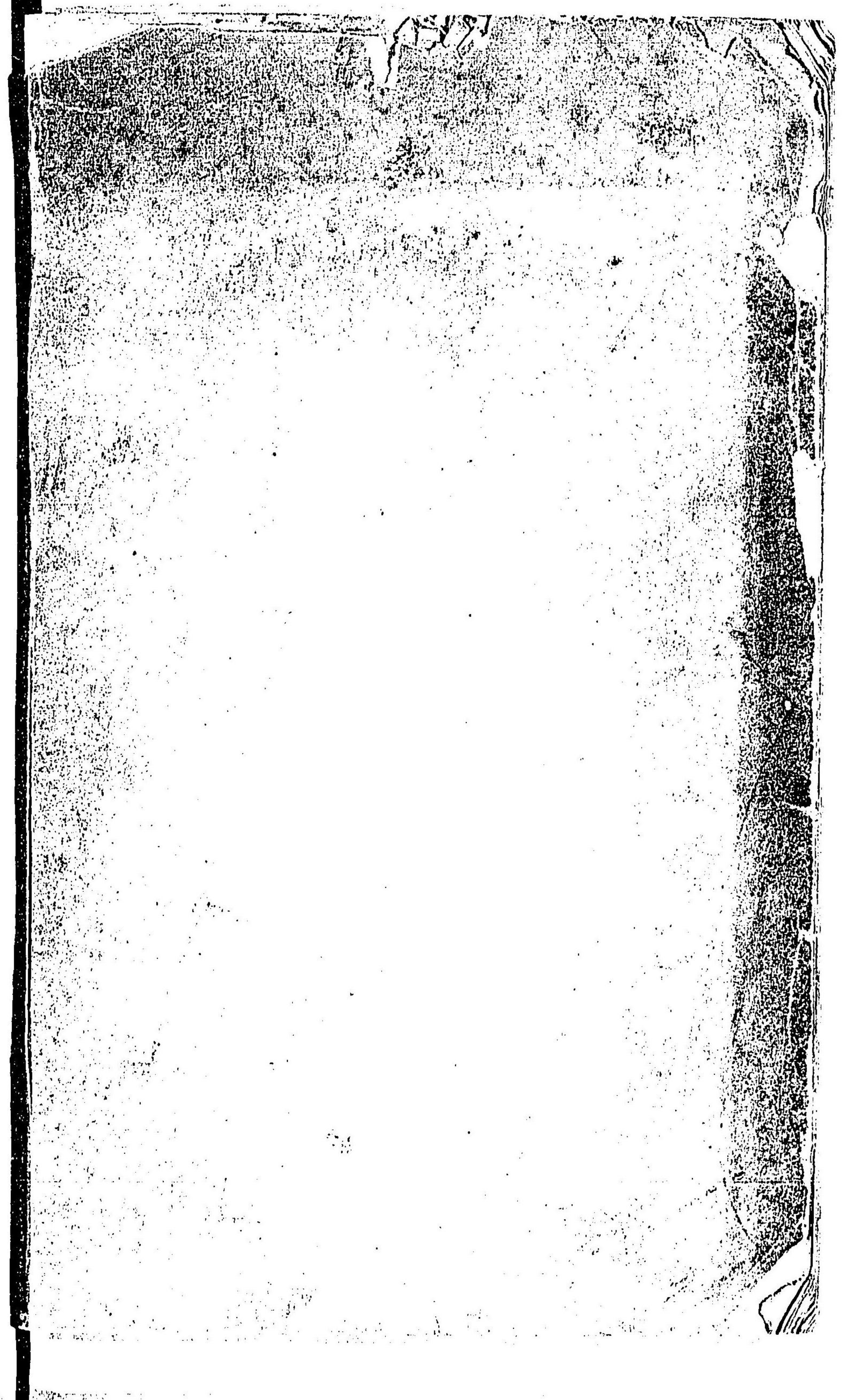
京橋區中橋和泉町四番地

版權所有

賣捌所

東雲堂本店

名古屋市本町通六丁目





091867-000-1

特26-902

別天地

集文館

M24

DBO-0399

